永遠の真理

ETERNAL TRUTH

2026年 1-2月

「神のみかたちを回復する」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

はじめに　「彼らもまたわたしたちのうちに一つになるように」 3

朝のマナ　「神のみかたちを回復する」 4
Restoring the Image of God

力を得るための食事　「豆腐キッシュ」 66
レシピ

お話コーナー　「アダムの最後の誕生日（II）」 78
聖書物語

【正丸教会】
〒368-0071　埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465

【沖縄集会所】
〒905-2261　沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス　www.4angels.jp
メール　sdarm.shomaru@gmail.com

発行日　2025 年 12 月 7 日
編集＆発行　SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Sakusabe on Front page; Joe Maniscalco on page 4

Printed in Japan

「彼らもまたわたしたちのうちに一つになるように」

「さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたに勧める。みな語ることを一つにして、お互の間に分争がないようにし、同じ心、同じ思いになって、堅く結び合っていてほしい。」

一致は力であり、分裂は弱さである。現代の真理を信じる人々が一致するとき、彼らは効果的な感化力を及ぼす。サタンはこのことを理解している。彼は今ほど、主の民の間に苦々しさと不和を生じさせることによって、神の真理の効力をなくそうと決心しているときはなかった。…

もし神の民が共に押し進むべき時があるとすれば、それは今である。神はこの世に知らせるようにと、わたしたちにこの時代のための特別な真理をゆだねてこられた。憐れみの最後のメッセージは今、伝えられなければならない。わたしたちは裁きを受けなければならない男女を扱っているのである。わたしたちの模範が人々をキリストに導くように、一つ一つの言葉や行動において、どれほど注意深く厳密に型に従っているべきであろうか。どれほどの注意もって真理を提示し、他の人々が真理の美しさと単純さを見てそれを受け入れるように努めるべきであろうか。もしわたしたちの品性がその聖化する力を証するなら、他の人々に対して継続的な光となるのである。生きた手紙となりすべての人に知られ、読まれるようになる。わたしたちは今、不一致、不和、また紛争をいだくことによって、サタンに場所を与える余裕はない。

このような一致と愛がご自分の弟子たちの間に存在するようにというのが、わたしたちの救い主が十字架の前に捧げた最後の祈りの重荷であった。目の前にある十字架の苦悩がありながら、このお方が憂慮されたのは、ご自身のことではなく、この地上でご自分の働きを前進させるべき人々のことであった。最も厳しい試練が彼らを待ち受けていたが、彼らの最大の危険は、苦々しさと分裂の精神から来ることを、イエスはご覧になった。そのためにこのお方は祈られた。

「真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります。あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました。また彼らが真理によって聖別されるように、彼らのためわたし自身を聖別いたします。わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らもまたわたしたちのうちに一つになるためであり、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります。」

このキリストの祈りには、終わりの時にいたるまで、ご自分に従うすべての人が含まれている。(教会への証 5 巻 236, 237)

神のみかたちを回復する

Restoring the Image of God

1-2 月

1 月　わたしたちの創造主にして救い主
2 月　霊と真理における戦い

キリストと創造

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。」(ヨハネ 1:1 〜 3)

万物は神の御子によって創造された。(レビュー・アンド・ヘラルド 1910 年 8 月 18 日)

この地球がキリストによって創造されたとき、神聖で美しかった。神はそれを「はなはだ良」いと仰せになった (創世記 1:31)。一つ一つの花、潅木、木が自分たちの創造主のご目的に応えた。(バイブル・エコー 1900 年 5 月 21 日)

主イエスは天地にある事物の造り主であり、ご自身の真理の解説者であられたので、神の栄光の光を反映するようにと、自然にお命じになった。空飛ぶ小鳥、野にある草花、森の木々、実りの多い畑、不毛の地、鎌を入れるばかりになった穀物、果物のならない木、日の出と日の入り、種まき、産物の取り入れ、—すべては神の真理の象徴として用いられている。このお方は創造主の目に見える働きと命のみ言葉を結び合わせ、人の思いを自然から自然を造られた神へとお向けになる。一つ一つのつつましやかな潅木、繊細な草花は神の愛の心の証を担う。もし目が閉じていなければ、もし耳が鈍くなっていなければ、もし心が神の御霊の印象を受けるために開いているなら、自然は、自然と霊が調和していることを語る。キリストは、自然界から引き出される実例を通じて、非常に重要な教訓を魂に教えてこられた。であるから、このお方がご自分の教訓に結びつけられた対象を熟考するかたわら、そのみ言葉を考えることにより、神聖な重要性がさらに思いに明らかになる。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1892 年 10 月 24 日)

神は、イエス・キリストによって—香や、何かつかみどころのないものでなく、個性を持っておられる神は—人を創造し、彼に知性と権威をお授けになった。(今日神と共に 273)

過ちによってかたくなにならず、偽りの理論によって歪められていない心—誠実に何が真理であるかを知りたいと願う心は、キリストが魂にもたらすメッセージを喜んで受け入れる。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1892 年 10 月 24 日)

1月2日

神のかたちに造られた

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。」(創世記 1:27)

地は創造主のみ手により非常に美しく現れた。山々、丘、平原があり、それらの間に川や湖水が点在していた。地は一つの広大な平原ではなく、丘や山々は今のように高く荒削りでなく、調和が取れた美しい形で、景色の単調さは破られていた。むき出しの高い岩は見られず、地の骨組みとしての役割を果たし、表面の下に敷かれていた。多量の水は規則正しく分散していた。丘、山々、平原は草木や花々で飾られ、今の木々よりも何倍も高くはるかに美しい、あらゆる種類の高い堂々たる木々で飾られていた。空気は清らかで健康的であり、地は気高い宮殿のように見えた。天使たちは神の素晴らしい、美しいみ業を眺めて喜んだ。

地が創造され、獣がそこに創造された後、御父と御子はサタンの堕落の前に計画しておられた、ご自身の形にかたどって人を造るという目的を実現された。御父と御子は地とその上に住む生き物をことごとく創造するにあたって共に働かれた。そして今、神は御子に「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造」ろうと仰せになる (創世記 1:26)。アダムが創造主のみ手によって現れたとき、彼は背が高く、みごとに均整が取れていた。彼はいま地上に生きている人々の二倍以上の背丈があり、よく釣り合いが取れていた。彼の顔立ちは完全であり美しかった。顔色は白くも黄ばんだ色でもなく、血色の良い健康にあふれた顔色であった。エバはアダムほど背は高くなく、彼女の頭は彼の肩より少し上であった。彼女も気高く―完全に均整が取れており、非常に美しかった。

この罪のない夫婦は手で作った衣服を着ていなかった。彼らは天使が着るような、光と栄光の衣をまとっていた。(預言の霊 1 巻 24, 25)

美しい園の家庭

「主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた。」（創世記 2:8）

神が造られた一つ一つが美の極みであり、神がアダムとエバを幸福にするために創造された地上に何も欠けているようには見えなかったけれども、このお方は彼らのために特別に園に植物を植えることで彼らに対するご自分の大いなる愛を表された。彼らの時間の一部分は園を整える幸福な仕事に、一部は天使の訪問を受けて、彼らの教えに耳を傾けるために、幸福な瞑想に当てられるべきであった。彼らの労働は疲れさせるものではなく、楽しい元気づけるものであった。この美しい園は彼らの家庭、彼らの特別な住まいとなるべきであった。

主はこの園の中に有用性と美しさのためにあらゆる種類の木々を配置された。そこには香り豊かで、目に美しく、おいしい、神が聖なる夫婦の食物となるように計画された、よく育った果物がたわわになっている木々があった。そこには、堕落以来だれも見たことのないような、実の房をたわわにつけ、まっすぐに伸びているぶどうの木があった。その実は非常に大きく、さまざまな色であり、あるものはほとんど黒に近く、あるものは紫、赤、ピンク、薄緑であった。ぶどうの枝についている美しくよく育った実はぶどうと呼ばれた。それらは地面を這わず、蔓（つる）棚で支えられなくても実の重みで垂れ下がることはなかった。香り高い実をたわわにつけた、自然の美しい生きた木々と葉で住まいを形づくりつつ、ぶどうの枝を仕立て、美しい木陰の休息所をつくることはアダムとエバにとって幸せな働きであった。

あらゆる種類と色合いの香りたかい無数の草花が、あちこちにあふれるばかりに生えている一方で、地は美しい新緑で装われていた。なにもかも趣（おもむき）があり、燦然と配列されていた。園の中央には他のすべての木にまさって栄光に輝く命の木が立っていた。その実は金と銀の混じったりんごのように見え、不死を永続させるためのものであった。（預言の霊 1 巻 25, 26）

1月4日

楽しい生活

「〔あなたは〕ただ少しく人を天使よりも低く造って、栄えと誉とをこうむらせ、これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました。」（詩篇 8:5, 6 欽定訳）

エデンにいる聖なる夫婦は非常に幸せであった。彼らにはあらゆる生き物への無限の支配権が与えられた。ライオンと小羊は彼らの周りで平和に無邪気に戯れる、あるいは彼らの足元でまどろんだ。あらゆる色や羽の小鳥たちが木々や草花の間またアダムとエバの周りを飛びまわり、彼らのやわらかく美しい音色の快い響きは、創造主をたたえて美しい調和のうちに木々の間をこだました。

アダムとエバは彼らのエデンにある家庭の美しさに魅了された。彼らは自分たちの周りにいる小さな歌手、輝く優美な羽根をまとい、幸福な快い音楽をさえずり続けていた。聖なる夫婦は小鳥たちと一緒に、自分たちを取り囲む愛のしるしのゆえに、御父とこのお方の愛する御子への愛と賛美と崇拝の調和の取れた歌に彼らの声をあげ、小鳥たちと和した。彼らは無限の知恵と知識を語る創造の秩序と調和を認めた。彼らは、エデンの家庭の何か新しい美しさとさらなる栄光を絶えず発見し、それらは彼らの心を深い愛で満たし、彼らの唇から創造主への感謝と崇敬の表れが出た。（預言の霊1巻 26, 27）

アダムには、天の小模型であるエデンにおいて神のみ働きにおける計画のための主題があった。神は、人がご自分の栄光に満ちたみ働きを単に熟考するために形づくられたのではなかった。それゆえこのお方は彼に熟考のための思いと心と同様働くための手をお与えになった。もし人の幸福が何もしないことにあるなら、創造主はアダムに定まった働きをお与えにはならなかった。人は瞑想と同様労働にも幸福を見出すべきであった。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1874 年 2 月 24 日）

最初の両親のエデンの家庭を並外れて麗しく造られた神は、わたしたちの幸福のために、威厳のある木々、美しい草花、自然界にあるあらゆる麗しいものもまた与えておられる。（健康改革者 1871 年 7 月 1 日）

自然界の神秘を喜ぶ

「あなたは知っているか、雲のつりあいと、知識の全き者のくすしきみわざを。」（ヨブ 37:16）

聖なる夫婦は、父としての神の保護を受ける子供たちであるばかりでなくて、知恵にみちた創造主から教えを受ける生徒でもあった。彼らは天使たちの來訪を受け、何の隔てもなく、創造主と交わることを許された。彼らは命の木によって与えられた生気に満ち、彼らの知力は天使よりわずかに劣るだけであった。目に見る宇宙の神秘―「知識の全き者のくすしきみわざ」―は彼らにとって尽きない教えと喜びの泉であった（ヨブ 37:16）。過去六千年の間、人間が研究を続けてきた自然の法則と作用は、万物の創造者であり、維持者である無限のお方によって、彼らの思いに開かれた。彼らは木の葉、草花、樹木と語り、それぞれの命の神秘を学んだ。アダムはあらゆる生物、水中に遊ぶ巨大な海魚から日光の中の小さな昆虫にいたるまで、被造物を熟知していた。彼はおのおのに名を与え、すべてのものの性質と習慣によく通じていた。もろもろの天の神の栄光、整然と運行する無数の世界、「雲のつりあい」（ヨブ 37:16）、光と音、昼夜の神秘などのすべては、われわれの初めの両親の研究の課題であった。森林のあらゆる葉に、山々の岩石に、すべての輝く星に、大地に、大気に、大空に、神のみ名が記されていた。造られた世界の秩序と調和は、無限の知恵と力とを彼らに語った。彼らは自分たちを強くひきつけ、彼らの心を深い愛で満たし、新たな感謝の声をあげさせるものを常に発見するのであった。

彼らが神の律法に忠誠を尽くしているかぎり、知って、理解を深め、愛する彼らの能力は絶えず啓発されるのであった。彼らは常に新しい知識の宝庫を手に入れ、新しい幸福の泉を発見し、神のはかり知れない不滅の愛について、ますます明瞭な観念をいだくようになるのであった。（人類のあけぼの上巻 26，27）

1月6日

本来の実質的な教室

「〔アダムとエバは〕日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。」（創世記 3:8）

天地が創造された時に定められた教育制度は、後世にいたるまで、人類の模範となるべきものであった。その原則を実地に示すものとして、人類の始祖の故郷であるエデンにモデル・スクールが設けられた。エデンの園が教室であり、自然が教科書であり、創造主ご自身が教師であり、人類家族の両親であるアダムとエバが生徒であった。

「神のみかたちと栄光」として創造されたアダムとエバは、そのとうとい身分にふさわしい才能をさずけられていた（コリント第一 11:7）。優美で均整のとれた肢体、美しくととのった容貌、健康と喜びと希望にかがやく顔色、彼らのそうした外観は、創造主のみかたちに似ていた。このように似かよった点は、ただ肉体の面ばかりではなかった。知能と魂のあらゆる面に、創造主の栄光が反映していた。アダムとエバは、「御使たちよりも低」くつくられ（ヘブル 2:7）、高い知的および霊的な賜物を授けられていた。それは、彼らが目に見える宇宙の神秘を認識するばかりでなく、また霊的な責任と義務を理解することができるように与えられたのであった。……

ご自分の子らに関心をおよせになる父なる神は、自ら彼らの教育を指導された。聖天使たちは、神の使者として、たびたび彼らを訪れては、神の教訓と勧告を伝えた。日の涼しいころ、アダムとエバが園の中を歩いていると、よく神のみ声がきこえてきた。こうして彼らは、永遠の神と顔をあわせて交わりを続けた。彼らに対する神の思いは、「災を与えようというのではなく、平安を与えよう」（エレミヤ 29:11）との思いであった。神のみこころの一つ一つは、彼らの最高の幸福ということにあった。……

自然界の法則と営み、また霊界を支配する真理の大原則は、万物の創造主であり限りない存在であられる神によって、彼らの心に示された。……彼らは、自分たちの神聖な存在に、最高の歓喜をおぼえた。（教育 10 ～ 12）

すべての時代のための模範学校

「しかし獣に問うてみよ、それはあなたに教える。空の鳥に問うてみよ、それはあなたに告げる。あるいは地の草や木に問うてみよ、彼らはあなたに教える。海の魚もまたあなたに示す。これらすべてのもののうち、いずれか主の手がこれをなしたことを知らぬ者があろうか。すべての生き物の命、およびすべての人の息は彼の手のうちにある。」（ヨブ 12:7-10）

「神は自分のかたちに人を創造された」（創世記 1:27）としるされている。神の御目的は、人が長く生きれば生きるほど、ますます、はっきりと神のみかたちをあらわすこと、すなわちなおいっそう明らかに創造主の栄光を反映することであった。人間のあらゆる才能は発達することが可能であって、それらの才能の能力と活力はたえず増大することになっていた。そうした才能を働かせるために、広い機会が与えられ、研究のために輝かしい分野が開かれていた。目に見える宇宙の神秘、すなわち、「知識の全き者のくすしきみわざ」（ヨブ 37:16）が人の研究を招いていた。創造主と顔をあわせて、心と心の交わりをすることが、アダムのとうとい特権であった。もし彼が、神への忠誠心を変えなかったなら、この特権は、永久に彼のものとなったであろう。彼は、永遠にわたってたえず知識の新しい宝を手に入れ、幸福の新しい泉を見いだし、神の知恵と力と愛についていよいよ明らかな概念を持ちつづけたであろう。（教育 4）

エデンの園は、全地をこのようにしたいという神のご希望のあらわれであった。人類家族の数がふえるにしたがって、エデンの園で神からあたえられたのとおなじような他 の家庭や学校を設けるようにというのが神のみこころであった。こうして全地は、時がたつにつれて、神のみ言葉とみわざを学ぶ家庭や学校で満たされ、生徒たちは、永遠 にわたって、神の栄光を知る光を、ますます深く反映するのにふさわしい者となるはずであった。（教育 12）

エデンにおいて確立された教育の制度は、家族を中心とするものであった。アダムは「神の子」であった（ルカ 3:38）。神の子らは、父なる神から教えをうけた。彼らの学校は、真の意味において、家庭学校であった。（教育 26）

1月8日

エデンでの待ち遠しい日

「神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである。」（創世記 2:3）

エデンで設けられた安息日の制度は、世界の誕生と共に古い。（人類のあけぼの上巻 397）

第四条はその起源を創造のときに置く。創造主の休息の日は聖なるエデンでアダムによって聖別された。（サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1884 年 2 月 24 日）

もし人が常に安息日を守っていたなら、世に不信心者、無信仰者、無神論者は決していなかったことであろう。もしアダムとエバが、世を創造することにおける神のみ働きを熟考していたなら、もし彼らが、神が彼らに安息日をお与えになった理由をよく考えていたなら、もし彼らの幸福のために加えることのできるものは何一つ差し控えずに与えて下さった美しいしるしを彼らが眺めていたなら、彼らは安全であり、自分たちに対するこのお方のいつくしみと愛のゆえに、このお方をあがめ、神に非難を浴びせるサタンの詭弁に耳を傾ける代わりに、神のみ手のわざに注意を払い、快い調べ、感謝、ほめたたえる賛美が彼らの口からほとばしりでていたであろうに。もし彼らが、神が自分たちをどれほどご自分のあふれるばかりの愛の対象としておられたかをよく考えていたなら、堕落することはなかったのである。しかし彼らは神のご臨在を忘れた。彼らは、み使いたちがあらゆる危険から彼らを守るために、彼らの周りを取り囲んでいることを忘れ、大いなる恩人であるお方から目をそらした。

安息日は現代へのテストである。霊とまこととによって第四条の戒めに従うことで、人々は十戒の教訓すべてに従う。この戒めを成就するために、人は神を最高に愛し、このお方が造られたすべての被造物に愛を働かせなければならない。主はわたしたちに「安息日を覚えて、これを聖とせよ」と熱心にお勧めになる（出エジプト 20:8）。そしてそのとき以来、これはこのお方の熱心な勧めであるので、だれかがこの戒めを彼らの記憶にもたらすことで彼らをうんざりさせるとわたしたちを責めるのであろうか。（サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1896 年 2 月 13 日）

道徳上の品性のテスト

「主なる神はその人に命じて言われた、『あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう』。」（創世記 2:16,17）

人類の始祖アダムとエバは、罪のない聖なる者につくられたが、絶対に悪いことができないようにはつくられなかった。神は、彼らをご自身の要求にそむく能力のない者におつくりになることもできたであろう。しかし、もしそうであったなら、品性の向上はあり得ず、彼らの奉仕は自発的でなく、強制的なものとなったであろう。そこで神は、彼らに、選択の能力すなわち服従するかあるいは服従を拒むか、そのどちらでもできる能力をお与えになったのである。そして彼らは、神が彼らに与えようと望んでおられる祝福をもれなく受けるに先だって、まずその愛と忠誠心を試みられなければならなかった。……

神のみこころは、アダムとエバが悪を知らないようにということであった。善の知識は惜しみなく彼らに与えられていたが、悪の知識すなわち罪とその結果である苦労、煩悶、失望、悲嘆、苦痛、死といったようなことは、愛のゆえに、彼らに知らされずにいた。（教育 14）

主は人に猶予の期間を置かれたが、それは彼が自分自身の幸福のために、また創造主の栄光のために、堅固な正直さの品性を形づくることができるためであった。このお方はアダムにご自分が造られた他のどの被造物にもまさった思いの力をお授けになっていた。彼の精神力は天使よりも少し低いだけであった。……

アダムに与えられた最初の道徳上の教訓は自己否定の教訓であった。自己統治の手綱は彼の手の内にあった。判断、理性、良心が支配すべきであった。……

アダムとエバは一つを除いて園にあるどの木からも取って食べることを許されていた。一つの禁止があった。許されていない木は園にある他の木々と同じように魅力的で美しかった。それは神が「取って食べてはならない」と仰せになったその木の実を食べると罪の知識と不従順の経験を持つので、知識の木と呼ばれた（創世記 2:17）。（コンフロンテイション 12）

1月10日

邪悪な陰謀が始まる

「さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であった。へびは女に言った、『園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が言われたのですか』。」（創世記 3:1）

エバは草花の色や香りで感覚を楽しませ、木々や茂みの美しさに感嘆しながら、夫のそばから離れて行った。彼女は、神が知識の木に関して、自分たちの上に置かれた制限のことを考えていた。エバは、あらゆる必要を満足させるために主が備えてくださった美しいものと恵み深さを喜んだ。これら全ては楽しむようにと神がわたしたちに与えてくださった、と彼女は言った。それらは全てわたしたちのものである。なぜなら神が「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない」と仰せになったからである（創世記 2:16,17）。

エバは禁じられた木の近くを歩き回っていた。そして死がこのきれいな木の実の中にどのように隠れていることができるのかを知りたいという好奇心が起こった。彼女は、見知らぬ声が自分の疑問を取り上げ、くりかえしたのを聞いて驚いた。「園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が言われたのですか」（創世記 3:1）。

エバは、自分と聞こえるように話している中に、自分の考えが表されていることに気づかなかった。それゆえ、自分の疑問がへびによって繰り返されるのを聞いて非常に驚き、そのへびには彼女の考えていることが分かるので、非常に賢いに違いないと、本当に思った。（コンフロンテイション 12, 13）

わたしたちは常に誘惑から来る考えを妨げることはできないが、それらを口に出さないように、敵に抵抗することはできる。魂の敵は人々の考えを読み取ることは許されていないが、彼は鋭敏な観察者であり、言葉と行動に注意し、それに応じて自分の誘惑を上手に適合させる。……

ああ、一瞬間でも幕が分かたれ、全天が人類に抱いている関心をあなたが見ることができたなら！神と天のみ使いたちは、わたしたちが自分自身を全ての罪から清めるつもりがないのかどうかを見ようと熱心に待っている。（ヒストリカル・スケッチ 146）

一歩一歩巧みな計略

「なぜ疑ったのか。」（マタイ 14:31）

もう二度と神の恵みにあずかる可能性がなくなったことをはっきりとサタンが知ったとき、彼の悪意と憎しみが現われ始めた。彼は、彼の天使たちと謀って、なおも、神の統治に反抗する計画を立てた。アダムとエバが、美しい園におかれたときに、サタンは、彼らを滅ぼす計画を立てていた。この幸福な夫婦は、神に従ってさえおれば、その幸福を奪われることはできなかった。彼らがまず神にそむき、神の恵みを失うのでなければ、サタンは、彼らに働きかけることはできなかった。であるから、彼らを不服従に導き、彼らが神の不興を招いて、サタンと彼の天使たちの直接の影響のもとに陥るような計画をたてなければならなかった。サタンが姿を変えて、人間に対する関心を示すようにすることが決定された。彼は、遠回しに神の真実性を否定し、神が言われたことが真実であるかどうかを疑わせなければならなかった。次に、彼らの好奇心を起こさせて、神のはかり知ることができない計画をせんさくさせなければならなかった。これは、サタン自身が犯した罪そのものであった。そして、神はなぜ善悪を知る木について禁令を発せられたのかを、彼らに考えさせなければならなかった。（初代文集 256, 257）

〔サタンは〕やわらかい、快い言葉で、音楽のような声で、不思議に思っているエバに話しかけた。彼女はへびが話すのを聞くことにびっくりした。彼は彼女の美しさと非常な素晴らしさを誉めそやし、それは彼女にとって不快ではなかった。しかし彼女はびっくりした。なぜなら神はへびに話す力を与えてはおられないことを彼女は知っていたからである。

エバの好奇心が起こり、その場所から逃げる代わりに、彼女はへびが語ることに耳を傾けた。それがへびを媒介として用いている堕落した敵に違いないということが、彼女の思いには起こらなかった。話したのはへびではなく、サタンであった。エバはだまされ、へつらわれ、惑わされた。彼女が天使のような姿をして、天使と同じように見える、威厳のある人に会ったのであれば、警戒したことであろう。しかし、その聞きなれない声を聞いて、彼女はなぜ他のものがこのように気安く自分に話しかけるかを尋ねるために、自分の夫の許へ急いで戻るべきであった。しかし彼女はへびと論じ始める。彼女は彼の質問に答える。（預言の霊 1 巻 36）

1月12日

欺瞞的な戦略を避ける

「悪をたくらむ者の心には欺きがあり、善をはかる人には喜びがある。」（箴言12:20）

エバがこの誘惑者と言葉をかわしさえしなかったら、彼女は安全であっただろう。だが彼女は、サタンにかかわり合ったために、彼の策略に落ちてしまった。今でも多くの者が打ち負かされるのは、このようにしてである。彼らは、神のご要求について疑いを抱き、議論する。彼らは、神のご命令に従わないで人間の説を受け入れるが、それは、偽装されたサタンの策略にすぎない。（各時代の大争闘下巻 278）

サタンは大欺瞞者である。わたしたちにとって彼の誘惑を受け入れることは、実現しうるどんな地上の損失よりも、しかり、死そのものよりも悪い。サタンの意志と計画への服従という恐るべき代価を払って成功を得る者は、自分が損害を与える取引をしたことに気づく。サタンとの取引は、何であっても高い代価を払うことになる。彼の示す利益は、蜃気楼である。彼が差し出す高い希望は、立派で気高く純潔なものを失うことによって手に入る。サタンを常に「と書いてある」というみ言葉よって打ち負かしなさい。「すべて主をおそれ、主の道に歩む者はさいわいである。あなたは自分の手の勤労の実を食べ、幸福で、かつ安らかであろう」（マタイ 4:4; 詩篇 128:1, 2）。

義の働きを行う用意のできている者は、敵の誘惑によって欺かれることはない。彼の行動は正しいという感覚で導かれ、善悪の区別、真理、高められた真理と誤りの区別をすることができる。天の王国に入る者は、道徳的な義務の最高の基準に到達している者、真理を隠し、欺こうとしていない者、彼らによって神が高められ、そのみ言葉が擁護されている者、彼らのうちにある原則が、サタンのたくらみの正当性を立証するために誤用されていない者である。主の贖われた者のために敷かれた道は、すべての世的な計画や実行のはるか上にある。その中を歩く者は自分たちの原則の清らかさを働きによって示すべきである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1909 年 2 月 24 日）

1月13日

神が仰せになったことの内に留まる

「女はへびに言った、『わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました』。」（創世記 3:2, 3）

エバは神のご命令の言葉に付け加えた。神はアダムとエバに「しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」と仰せになっていた(創世記 2:17)。サタンとのエバの論争の中で、彼女は、「これに触れるな」を付け加えた。ここでサタンの狡猾さがあらわれた。エバのこの言葉は彼を有利にした。彼はその果物をもぎ取ってエバの手に置き、彼女自身の言葉を用いて、次のように言った。もしあなたがそれに触れるなら、あなたは死ぬとこのお方は仰せになった。あなたが見ているように、その実を触っても何の害も受けていないのだから、それを食べても何の害も受けないであろうと。（コンフロンテイション 14）

わたしたちの熱心な兄弟のだれも……主の前に出て、主が彼らになすよう命じておられないテストを作るような危険を冒さないようにしなさい。（伝道 374）

わたしたちはパリサイ人の律法のような律法を作らないよう、あるいは人の戒めを教理として教えないよう注意すべきである。（医療伝道 284）

神は、人への大いなる愛のうちに、彼の行為を指図する律法をお与えになった。それによって、彼がこの地上においてさえ、自分自身の本当の幸福と人類同胞の真の幸福を増し加えるような傾向を持つ事柄をするよう律せられるためであった。日々の生活の中で実行される戒めの原則は、心と思いを気高くし、また聖化して、イエス・キリストを通して人を聖天使との交わりに、道徳的にふさわしいものとする。全く賢明であられるわたしたちの天父は、人を罪から守り、彼の生涯を整えて、天にふさわしい臣民にする徳を実践するよう導くのにどの規則が要求されるかをご存じであった。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1878 年 7 月 18 日）

主は、その大いなる憐れみのうちに、聖なる生活のご自分の規則、ご自分の戒め、ご自分の律法を聖書でわたしたちに表してこられた。このお方はその中で罪を遠ざけるようにと仰せになる。わたしたちに救いの計画を説明し、天への道をお示しになる。（クリスチャン教育 188）

1月14日

世界最古のうそ

「へびは女に言った、『あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです』。」（創世記 3:4, 5）

〔創世記 3:4, 5 参照〕。ここで偽りの父は神の表されたみ言葉への直接の反論を主張した。サタンはエバに、彼女は創造された不死の人であり、死の可能性はないと保証した。もし彼女とその夫が知識の木の実を食べると、彼らの悟りが啓発され、広がり、高尚になり、彼らを神ご自身と同じにすることを、神は知っておられると言った。そしてへびは、エバに答えて、彼らに知識の木の実を食べることを禁じた神の命令は、彼らが知識、すなわち力を得ることがないように、このような従属的な状態にとどめておくために与えられたのだと言った。この木の実は彼らを賢くするには園の他のどの木よりも望ましく、彼らを神と同等へと高めると、彼は彼女に保証した。全ての木の中でおいしい風味と元気にさせる感化力にとって最も望ましいその木の実を神はあなたに与えることを拒んでおられると、へびは言った。

へびの言うことは非常に賢く、神の禁止令は不公平であるとエバは考えた。彼女は非常においしそうに見える果物がたわわになっている木をあこがれに満ちた願いをもって見上げた。へびは明らかに喜んでそれを食べていた。彼女は、神が自分に完全に食べる権利を与えておられる他のどの果物にもましてこの果物を切望した。（対決 13,14）

律法の主張が示されるとき、人は、神がご自分の教訓を破ることに対して彼らを罰しないようにとはっきり述べつつ、不服従を続けるための言い訳を工夫し始める。それをまじめに考えよう。神はわたしたちの都合に合わせるためにご自分の聖なる律法を変更なさるであろうか？このお方は罪を是認し、不服従を黙認なさるであろうか？もし神がこの類の品性を持っておられるなら、わたしたちはこのお方を敬うことはできない。このお方の権威を尊重することはできない。神の律法へのどの違反も違反者への罰が訪れる。罪の支払う報酬は死である。神はご自分の律法の誉を注意深く守られる。それは天と地におけるこのお方の統治の基礎である。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1890 年 11 月 18 日）

エデンにおける悲劇

「女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので、彼も食べた。」（創世記 3:6）

天使たちは、サタンについて彼らに警告し、この堕落した敵に出会うといけないから、仕事をしているときに、互いに離れてはならないと注意した。天使たちは、また、神が彼らにお与えになった指示に厳密に従うように命じた。というのは、完全に服従するときにのみ、彼らは安全であったからである。……

彼女の第一の誤りは、夫から離れたことであった。次に、禁じられた木のあたりをさまよい、さらに、誘惑者の声に耳を傾けて、「それを取って食べると、きっと死ぬであろう」と神が言われたことをあえて疑った。彼女は、神が、その言葉どおりのことを意味してはおられまいと考えて、思い切って手をのばして、その実を取って食べた。それは、見た目に美しく、食べるのにおいしいものであった。彼女は、神が、実際は彼らのためになるものを禁じられたのだと邪推した。そして、彼女は、その実を彼女の夫に差し出して、彼を誘惑したのである。彼女は、へびが言ったことをみなアダムに告げ、へびが語る力をもっていたことに対する驚きを表した。……

アダムは、これこそ警告されていた敵にちがいない、妻は死ななければならないと感じた。彼らは別れなければならない。エバに対するアダムの愛は強かった。すっかり落胆してしまったアダムは、エバと運命を共にする覚悟をきめた。彼は木の実をつかんですばやく食べた。サタンは狂喜した。彼は天において反逆を起こし、彼を愛し彼の反逆に参加した共鳴者たちを得ていた。彼は、堕落し、他の者をも彼と共に堕落させていた。そして今、彼は、女を誘惑して神に対する不信を抱かせ、神の知恵をさぐって、全知であられる神の計画をきわめさせようとしたのであった。サタンは、女がただひとりで堕落するのではないことを知っていた。エバを愛するあまりに、アダムも神の戒めにそむき、彼女とともに堕落したのであった。

人類が堕落したという知らせは、全天にひろがった。琴は全部鳴りをひそめた。天使たちは悲しみのあまり、頭の冠を脱ぎすてた。（初代文集 257 ～ 259）

1月16日

エデンからの警告

「よこしまな者の道に、はいってはならない、悪しき者の道を歩んではならない。それを避けよ、通ってはならない、それを離れて進め。」（箴言 4:14, 15）

サタンは、善と悪のまじった知識は祝福となるものだとか、あるいは神がこの木の実をとることを禁じておられるのは、結局、大きな幸福を与えることをひかえておられるのだというようなことを、エバに思わせようと 望んだ。サタンは、神がこの果実を食べることを禁じておられるのは、この果実が知恵と能力をあたえる不思議な性質をもっているからであって、神はこのようにして、彼らがいっそう高い進歩をとげ、もっと大きな幸福を見いだすことのないようにしておられるのであると力説した。彼は、自分も禁断の実を食べた結果、話ができるようになったのであるから、もしエバたちもこの果実を食べたら、もっと高い境地に達し、もっと広い知識の分野に入るであろうと言明した。

サタンは、自分が禁断の木の実を食べたために、非常な恩恵をうけたと主張しながら、一方には、神にそむいたために、天より追われた身であることをかくしていた。欺かれ、おだてられ、迷わされたエバが、その欺瞞をみわけることができなかったほど巧妙に、真理の仮面の下に偽りがかくされていた。彼女は、神が禁じているものをほしがり、神の知恵を疑い、知識のかぎである信仰を捨ててしまった。……

「あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となる」（創世記 3:5）とサタンは言った。果たして彼らの目は開いたが、しかしそれは何という悲しい結果をもたらしたことであろう。神の戒めにそむいた彼らが得たものは、悪の知識と罪ののろいだけであった。果実そのものには何の害毒もなかった。また、ただ食欲に負けたことだけが罪というわけではなかった。アダムとエバが神の戒めにそむく者となり、この世に悪の知識をもたらしたのは、彼らが神の恵みを疑い、神のみ言葉を信じないで、神の権威を否定したからであった。それはまた、あらゆる種類の偽りや誤りに対して門を開いた。

神だけが全知であり真理であるにもかかわらず、アダムはその神のみ言葉に従わず、欺く者に聞き従ったために、いっさいのものを失ってしまった。（教育 15, 16）

窮屈で不適切な衣服

「すると、〔アダムとエバ〕ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。」（創世記 3:7）

アダムとエバはどちらもその実を食べ、彼らが神に従っていれば、決して得ることのなかったはずの知識―神への不服従と不忠実における経験―自分たちが裸であるという知識を得た。純潔な衣、すなわち彼らを取り巻いていた神からの覆いが離れ去ったので、彼らはこの天来の衣の代わりにいちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。

これは、神の律法の違反者が、アダムとエバの不服従の日以来、用いてきた覆いである。彼らは違反によってもたらされた自分たちの裸を覆うためにいちじくの葉をつづり合わせた。いちじくの葉は不服従を覆うために用いられる議論を表している。主が男女の注意を真理に引きつけると、その魂の裸を隠すためにいちじくの葉をつづり合わせることが始まる。しかし罪人の裸は覆われない。このみえすいた働きに関心のあるすべての者によってつなぎ合わされた議論はすべて失敗に終わる。

主イエス・キリストは覆い、ご自身の義の衣を備えておられるが、それは悔い改めて信仰によってそれを受け入れるどの魂にも着せてくださるためである。……罪は律法の違反である。しかしキリストは、一人びとりが自分の罪を取り除いていただくことができるために死なれた。いちじくの葉の覆いはわたしたちの裸を覆うことは決してない。罪は取り除かなければならず、キリストの義の衣が神の律法の違反者を覆わなければならない。主が信じる罪人をご覧になるとき、このお方は彼を覆っているいちじくの葉ではなく、エホバの律法への完全な従順であるご自身の義の衣をご覧になる。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1898 年 11 月 15 日）

警告を受け取りなさい。あなたの尊い猶予の期間を、罪の結果である裸を覆うためにいちじくの葉をつづり合わせるために充ててはならない。（原稿ﾘﾘｰｽ 21 巻 194）

1月18日

隠しても無駄である

「人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した。」（創世記3:8）

主はアダムとエバが禁じられた木の実を食べたのをご覧になった。彼らは罪悪感でこのお方のみ前から逃げ、身を隠したが、神は彼らをご覧になり、彼らの恥をこのお方の目から覆うことはできなかった。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1888 年 3 月 27 日）

アダムとエバは禁じられた実を食べることは非常にささいなことであり、神が宣言なさったほど恐ろしい結果をもたらすはずはないと信じた。しかしこの小さなことは罪であり、神の不変の聖なる律法の違反であった。そしてそれはわたしたちの世に死と数え切れないほどの苦悩の水門を開いた。各時代にわたり地から嘆きの叫びが絶え間なく上っており、人の不服従の結果として万物が共に痛みでうめき、苦労している。天そのものが神への人の反抗の結果を感じている。カルバリーは、神の律法の違反への怒りを静めるものとして要求された驚くべき犠牲の記念碑として立っている。罪をささいなこととして考えないようにしよう。無限の神の御子の手と足とわき腹は、言い表せない深い恨みとのろいの証を宇宙の前に担うべきではないであろうか。

ああ、老若の思いに罪の非常な罪深さに関する正しい印象が与えられるように！ああ、全ての者が神への攻撃と人類に対するその無礼を正しく認識することができると良いのに！真理のみ言葉は「その罪は必ず身に及ぶ」と宣言する（民数記 32:23）。あなたの生涯の一つ一つの行為の真の性質が知られるようになる。この世においてすら神のみ摂理によって、なにか予期しない状況があなたの悪い秘密の行為を暴露するかもしれない。しかしたとえあなたが自分の真の品性を人々の目から隠すことに成功したとしても、自分の罪を悔い改めず、わたしたちが生きることができるために死んでくださったキリストの力によって全ての悪と縁を断つことをしないどの魂のためにも運命づけられている、発覚の必ず起こる日がある。……「神はすべてのわざ、……を……さばかれるからである」（伝道の書 12:14）。（同上 1888 年 3 月 27 日）

1月19日

恥じ、わなにかかる

「主なる神は人に呼びかけて言われた、『あなたはどこにいるのか』。彼は答えた、『園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです』。」（創世記 3:9, 10）

アダムとエバが禁じられた実を食べた後、彼らは恥と恐怖の意識に満たされた。初め彼らの唯一の考えは、神の御前に自分たちの罪をどのように言い訳し、案じられる死の判決をどのように逃れるかであった。（教会への証 5 巻 637）

彼らが罪なく清いときであれば、喜んで創造主の近づいて来られるのを歓迎するのであったが、いまは、恐れて逃げ、園の奥深いところに隠れようとした。（人類のあけぼの上巻 46）

サタンは、わたしたちの最初の両親の堕落を果たした。そしてこの時から現在に至るまで、人間の野望を満足させること、また利己的な希望や願望にふけることは、人類の滅びであることが立証された。アダムは神のもとで、天の家族の原則を維持するために地上の家族のかしらとして立つべきであり、これは平安と幸福をもたらすはずであった。しかしだれも「自分のために生き」ない律法に、サタンは反対すると決心していた。彼は自己のために生きようと願い、自分を感化力の中心にしようとした。天で反逆を起こさせたのがこれであり、地上に罪をもたらしたのは、この原則を人が受け入れることによってであった。アダムが罪を犯したとき、人は天が任命された中心と関係を絶って、悪魔が世界の中心をなす力となった。神の御座があるはずのところにサタンは自分の王座を据えた。世はその敬意を心からの捧げものとして敵の足元に置いた。

神の律法への違反はその結果として悲哀と死をもたらした。人の力は不服従によって正道からはずされ、利己心が愛に取って代わった。彼の性質は非常に弱まり、悪の力に抵抗することは不可能になった。そして誘惑者は人を創造する神の計画を妨げる目的が果たされつつあるのを見た。……人々は自分たちを彼の車に捕虜としてつなぐ支配者を選んだ。（レビュー・アンド・ヘラルド 1913 年 1 月 16 日）

1月20日

だれでも他人を非難する

「神は〔アダムに〕言われた、『あなたが裸であるのを、だれが知らせたのか。食べるなと、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか。』人は答えた、『わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです』。」（創世記 3:11,12）

アダムは、自分の罪を否定し、言いわけをすることもできなかった。彼は、悔い改めの精神をあらわす代わりに、彼の妻を非難し、ひいては、神ご自身の責任にした。「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」(創世記 3:12)。エバを愛するがために、神に喜ばれることも、楽園の彼の家も歓喜に満ちた永遠の命をも捨てた彼が、罪を犯した今は、罪の責任を妻ばかりでなく、創造主ご自身にまで負わせようとした。罪の力は、これほどに恐ろしいのである。女が「あなたは、なんということをしたのです」と問われたとき、彼女は、「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」と答えた (創世記 3:13)。「どうしてあなたは、へびをお造りになったのですか。

へびがエデンにはいるのをどうしてお許しになったのですか」という質問が彼女の言いわけの真意であった。このようにして、彼女もアダムと同じく、彼らの堕落の責任を神のせいにした。自己を義とする精神は、偽りの父から始まった。この精神は、われわれの祖先がサタンの力に屈服すると直ちにあらわれた。そして、それ以来、アダムのすべてのむすこ、娘はこの精神をあらわしてきた。けんそんに自分の罪を告白するかわりに、彼らは他の人や、環境、あるいは神を非難して、自分を弁護しようとする。（人類のあけぼの上巻 46,47）

罪のために道徳的知覚が鈍くなってしまうと、悪を行う者は自分の品性の欠陥を認めもしなければ、自分が犯した罪の恐ろしさを悟ることもない。罪を示す聖霊の力に従わなければ、人は自分の罪に対して部分的の盲目である。であるから、その人の告白はまじめでもなければ熱心でもない。自分の罪を認めて悪かったとは言うものの、そのたびに自分の行為に弁解をつけ加え、ああいう事情さえ起らなかったら、自分はああもしなかったしこうもしなかったし、なにもしかられることはなかったのだと言う。……

真の悔い改めは、自分の罪を自分で負い、なんの虚飾も偽善もなく、罪を認めるのである。（キリストへの道 49 〜 51）

1月21日

必要とされた贖い代―そして見出された！

「もしそこに彼のためにひとりの天使があり、千のうちのひとりであって、仲保となり、人にその正しい道を示すならば、神は彼をあわれんで言われる、『彼を救って、墓に下ることを免れさせよ、わたしはすでにあがないしろを得た』。」（ヨブ 33:23, 24）

人類が失われ、神の創造なさった世界が不幸と病気と死の運命を背負った人間によって満たされ、罪びとにとってのがれる道のないことがわかったとき、天は悲しみに満たされた。アダムの全家族は死なねばならない。わたしは美しいイエスのお姿を見、その顔つきに同情と悲しみの表情をみとめた。まもなくわたしは、イエスが、天父をつつんでいる非常に輝かしい光に近づかれるのをみた。わたしにつきそっていた天使は、イエスが天父と親しく語っておいでになると言った。イエスが天父とお話しになっている間、天使たちは心配で緊張しているようにみえた。イエスのお姿は、天父のまわりの輝く光の中に、三度見えなくなった。三度目に、天父のところから出てこられるイエスのお姿がみられた。イエスの顔つきは落ちついて、困惑や疑いの影は少しもみられず、言いあらわしようのない慈愛に満ちていた。その時イエスは、失われた人類のためにのがれの道が備えられたことを天使の万軍にお知らせになった。イエスは、ご自分の生命を身代金として提供し、死の宣告をご自身に引きうけたいと天父に嘆願なさったことを語られた。それは、イエスを通して人類が罪のゆるしを得、イエスの血の功績を通し、また神の律法に従うことによって神の恩恵をあたえられ、美しい園へつれて行かれて生命の木の実を食べることができるようになるためだった。

最初天使たちはよろこぶことができなかった。というのは、イエスが彼らに何一つかくさないで、救いの計画をうち明けたもうたからだ。イエスは、ご自分が天父の怒りと罪を犯した人類との間に立たれることや、ご自分が不義とあざけりを一身に負われても、彼を神のみ子として受け入れる者は少ないことなどを、天使たちにお語りになった。（初代文集 260, 261）

〔天使は言った、〕「罪の人類を滅ぼすか、それとも人類のために愛し子を死なせるかということは、天の神にとっても戦いでした」と。（初代文集 264）

1月22日

なんという大きな代価！

「あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである。キリストは、天地が造られる前から、あらかじめ知られていたのであるが、この終りの時に至って、あなたがたのために現れたのである。」（ペテロ第一 1:18 ～ 20）

〔イエスはあらかじめ、御使たちに次のように語られた。〕イエスは、天の一切の栄光を捨てて、この地上に人としてあらわれ、人として身をいやしくし、人の受けるすべての誘惑を自らの経験を通して知り、どうしたら試みられる人々を救助することができるかを知られるのである。そして最後に、教師としてのイエスの使命が達成されてからは、人の手に渡され、サタンと悪天使たちが悪人たちをそそのかして、苦しめることのできるかぎりのあらゆる残虐と苦難を加えるのを忍び、最も残酷な死に方によって、不義な罪びととして天と地との間にかけられ、天使たちすら目をそむけ、顔をおおうような恐るべき苦悶にあわれるのである。イエスは肉体的な苦痛を経験されるばかりでなく、それとは比べものにならないほどの精神的な苦痛を味わわれる。全世界の罪の重荷が彼の上にのしかかるのである。イエスは、ご自分が死んで三日目にふたたび甦えり、わがままで不義な人類の執り成しをするために、天父のもとに昇天されるということをお語りになった。

天使たちはキリストの前にひれ伏した。彼らは自分たちの生命を捧げたいと申し出た。

イエスは、天使の生命では負債を払うことができないから、自分が死んで多くの人を救うのだと仰せになった。キリストの生命だけが、人類の身代金として天父に認められるのである。（初代文集 261,262）

これほどの愛と謙遜の対象として、わたしたちはどれほど贖いの神秘を感謝すべきであろうか。最も魅力的なかたちで示された世の壮麗さは、この偉大なへりくだりの前に無意味なものとして沈むべきである。キリストに真に従う者はこのお方のために喜んで苦しむべきである。彼らがこの神秘を熟考するとき、心は優しい愛、生き生きとした献身で満たされる。彼らは、よい働きをしながら巡回されたお方、また罪の退廃からわたしたちを贖うためにご自分の命を進んで与えてくださったお方の模範に従わなければならないと感じる。（レビュー・アンド・ヘラルド 1909 年 7 月 15 日）

救うために苦しむ

「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、また殺され、そして三日目によみがえる。」（ルカ 9:12）

イエスは、天使たちにも果たさねばならない役割があることをお語りになった。すなわち、彼らはイエスと一緒にいて、幾度かイエスを力づけるのである。イエスは人間の堕落した性情をとられるので、その力は天使たちに匹敵することさえできない。天使たちが、イエスの屈従や大きな苦難の目撃者となり、イエスの苦難や彼に対する人々の憎悪を目に見るときに、彼らは、魂の奥底までゆり動かされ、イエスを愛するあまり、彼を殺害者の手から救い出そうと思うのだが、手出しをして目の前に起こるどんな事柄も妨げてはならないのである。天使たちはまた、キリストの甦えりにあたって、一つの役割を演じなければならない。……

イエスは、聖なる悲しみの中にも、天使たちを慰めはげまし、今後は彼のあがないたもう人々が彼とともにいることや、彼はご自分の死によって多くの者をあがない、死の権力をもっている者を滅ぼしたもうことなどをお知らせになった。そのとき天父は、王国と、全天における王国の尊厳をキリストにあたえ、彼はそれを永遠に保ちたもうのである。サタンと罪びとは滅ぼされ、天やきよめられた新しい地を、もう決して妨害するようなことはなくなる。イエスは、天父の承知したもうたこの計画に天使たちが同意し、堕落した人類が、彼の死により、ふたたび高められて、神の恩恵にあずかり、天にうけ入れられることをよろこぶようにとお命じになった。

そのとき、言いあらわしようのないよろこびが天を満たした。天使たちは、賛美と崇敬の歌をうたった。彼らは、神が、反逆した人類のために愛し子を死なせたもう、その大きないつくしみとへりくだりのゆえに、立琴をかきならして、これまでよりも一段と高い調べをかなでた。イエスが、天父のひざもとを離れることを承知し、苦難と苦悶の一生をえらび、屈辱的な死を通して、人に生命をあたえたもうその克己と犠牲に対して、賛美と崇拝がわき起こった。（初代文集 262, 263）

1月24日

象徴における約束

「主なる神はへびに言われた、『おまえは、この事を、したので、すべての家畜、野のすべての獣のうち、最ものろわれる。おまえは腹で、這いあるき、一生、ちりを食べるであろう。わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう』。」（創世記 3:14, 15）

〔創世記 3:15 引用〕とサタンに言われた宣告は、われわれの最初の両親にとって、キリストを通してなされるあがないの、約束であった。（患難から栄光へ上巻 238）

だれが、神の支配と統治の中でこのお方に任命された原則を、サタンの計画をくじくためにもたらし、世界をその忠誠に連れ戻すことができるであろうか。神は仰せになった、わたしは御子をつかわす。〔ヨハネ 3:16 引用〕。これは罪のための救済策である。キリストは仰せになる。「サタンが彼の王座を置いたところに、わたしの十字架は立つ。サタンは追い払われ、わたしは全ての人をわたしに引き寄せるために上げられる。わたしは贖われた世界の中心となる。主なる神が高められる。今人間の野望、人間の情欲に支配されている者がわたしのための働き人になる。悪い感化力は全ての善に対抗するために陰謀をたくらんできた。彼らはエホバの律法に反対するために、人々にそれを正しいと考えさせようと共謀してきた。しかし、わたしの軍勢は闘争においてサタンの勢力に対抗する。わたしの霊が彼らに対抗するために天のすべての代理者と団結する。わたしは宇宙にいるすべての聖化された人間の代理者を従事させる。わたしの代理者は一人として欠けるべきではない。わたしは、わたしを愛するすべての者のための働きを持っており、わたしの指示の下で働くどの魂のためにも仕事を持っている。サタンの軍勢の活動、人の魂を取り巻く危険はどの働き人のエネルギーをも必要とする。しかし強制はされない。人の悪行は、神の愛、辛抱強さ、長い忍耐によって対応すべきである。わたしの働きはサタンの支配の下にいる者を助けるものとなる。

神は、キリストを通して、人を創造主との初めの関係に連れ戻し、サタンによって持ち込まれたまとまりを欠く感化力を正すために働かれる。（教会への証 6 巻 236）

1月25日

欺いてくびきにつなぐ

「ただ恐れるのは、エバがへびの悪巧みで誘惑されたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する純情と貞操とを失いはしないかということである。」（コリント第二 11:3）

エバはへびにだまされ、神はご自分が仰せになったようにはなさらないと信じ込まされた。……へびは彼女が死ぬことはないと言った。そして彼女は実を食べて、死を意味するように判断できる悪い結果を何も感じなかった。しかし、その代わりに、楽しい感覚があり、彼女はきっと天使が感じているものだろうと想像した。彼女の経験はエホバの明確な命令に真っ向から逆らうものであったが、アダムはそれによって誘惑されるままに屈した。

わたしたちはしばしばこのようなことを、宗教界においてすら見出す。神のはっきりとした命令が破られる。そして「悪しきわざに対する判決がすみやかに行われないために、人の子らの心はもっぱら悪を行うことに傾いている」（伝道の書 8:11）。神の最も明確な命令を目の前にしながら、男女は自分自身の傾向に従い、その後であつかましくもこのことに関して、神のはっきりとしたみ旨に逆らって行くことを許してくださるよう神を説得するために祈るのである。サタンはそのような者のそばに来て、エデンでエバにしたように、彼らに印象を与える。彼らの思いが働き、彼らはこれを主が彼らに与えて下さった最も素晴らしい経験として理解する。しかし真の経験は、自然の法則、神の法則と調和している。偽りの経験は、命の法則とエホバの教訓にこぞって反対する。（健康への勧告 108, 109）

〔サタンは〕、彼らが人間の領域を超えて高められるべきであると、エバをおだてて信じるようにさせた。しかしキリストは、ご自分がわたしたちの前に置かれた模範によって、人類家族が自分たちの人間の領域で神の御言に従いつつ、人となることができるように励まされる。このお方ご自身がサタンの属性を取るためではなく、神のご品性の写しであるその律法への従順と道徳力のうちに人となられた。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1897 年 10 月 14 日）

キリストだけが利己心の世で汚れのないままお立ちになった。そこでは人々はサタンによって自分たちの手に置かれた計画を成し遂げるために、友あるいは兄弟を破滅させるのである。……利己心という騒音のただなかで、このお方は人々に仰せになることができる、あなたの中心―神に帰りなさい。（教会への証 6 巻 237）

1月26日

野望によって落とされる

「女に言われた、『わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。それでもなお、あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう』。」（創世記 3:16）

神は創造のときに、〔エバ〕をアダムと等しいものに造られた。もし彼らが神に従って、その偉大な戒めに調和していたならば、彼らは、互いに調和しあってきたはずであった。しかし、罪が調和を破った。だから、一方が他方に従属することによって彼らの一致と調和が保たれるようになった。エバは最初に罪を犯した。彼女は、神の命令に反して、夫のそばを離れたために、誘惑に陥った。また、アダムは、彼女のすすめによって罪を犯した。そこで、彼女は、夫に従う立場におかれた。神の律法が命じているこの原則を、堕落した人類が守っていたならば、この宣告は、罪の結果によるものであったとは言え、彼らにとって、祝福となったことであろう。ところが、こうして与えられた優位を男が乱用したために、女の運命は非常に苦しく、彼女の人生は重荷となった。

エバは、エデンの家庭で、夫のそばにいて、完全な幸福を味わっていた。しかし、落ちつきを失った現代のエバたちと同様に、彼女は、神がお定めになったところより、もっと高い身分になりたいと望むようにそそのかされた。彼女は、初めに置かれた地位より高く上ろうとして、それよりはるか下に落ちた。神のご計画に従って、実生活の義務を快く果たそうとしない者は、みな同様になる。神がお与えにならなかった地位を得ようと努めて彼らが祝福となることのできる場所をあけるものが多い。高い身分を望んで、女性の尊厳と品性の気高さを犠牲にし、天が特に彼らに与えた働きを怠る者が多いのである。（人類のあけぼの上巻 47, 48）

天の王の娘たち、王家の家族は、より気高い生き方に到達する責任の重荷を感じるが、それは彼らが天との密接な交わりに入れていただくことができるためである。……［彼らは］この終わりの時代に女性の思いと愛着を吸い込む流行と愚行に満足しない。（教会への証 3 巻 484）

1月27日

呪われた地にもかかわらず希望がある

「〔神は〕人に言われた、『あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなと、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る』。」（創世記 3:17）

かつては神のご品性、すなわち善の知識だけが書かれていたところに、今はそれと共にサタンの品性である悪の知識が書きしるされている。いまや善と悪の知識を表わしている自然から、人は、罪の結果に対する警告を絶えず受けなければならなかった。

しぼむ花に、散る木の葉に、アダムと妻は、衰えというもののきざしを初めてまのあたりに見た。すべての生物はやがて死ななければならないというきびしい事実が、彼らの心にはっきり迫ってきた。彼らの生命をささえている空気にさえ、死の種がひそんでいた。

彼らはまた自分たちの失った支配権をたえず心に思い出した。人間よりも下級な被造物の中にあって、アダムは王としての立場にあった。彼が神に忠誠心を保っていた間は、自然界の万物は、彼の統治に従っていた。しかし彼が神の戒めにそむいたときに、この統治権は失われた。アダム自身によってこの世界にもたらされた反抗心は、動物界にまでひろがった。……

〔しかし〕彼らは、自分たちが経験しなければならないいばらやあざみのことや、労苦や悲哀のことや、土に帰らなければならないことなどを聞く前に、希望を与えずにはおかない約束の言葉をきかされた。サタンに屈服したために失われたすべてのものは、キリストによって再びとりもどされることができるようになった。

自然界もまたこの救済の暗示をわれわれにくりかえしている。自然界は、罪のために傷つけられてはいるものの、いぜんとしてそれは神の創造について語り、また救済について語っているのである。地は衰滅という明らかなしるしを通して、罪ののろいをあかししているが、しかもなお生命を与える能力を、豊かに美しく表象している。木々はその葉をふるいおとしても、それはもっと新しい緑したたる衣をまとい、花はしぼむが、やがてまた新しい美しさに姿を装ってあらわれる。神の創造力の一つ一つの現われには、われわれ人間が、「真の義と聖」の中に、再び新しく創造され得るとの確証が示されている（エペソ 4：24）。（教育 17 ～ 19）

1月28日

エデンからの立ち退き

「そこで主なる神は彼〔アダム〕をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕させられた。神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道を守らせられた。」（創世記 3:23, 24）

アダムとエバは神の創造されたみ業から得られ、聖天使の教えによって受け入れるこのお方の知識に完全に満足しているべきであった。しかし彼らが知識を持つべきではないと神が計画されたことを知ってみたいとの好奇心が彼らに起こった。罪に無知であることは彼らの幸福のためであった。彼らが禁じられた実を食べることによって到達すると考えた知識の高い状態は、彼らを罪と罪悪感の堕落へと投げ落した。（対決 15）

人類が堕落したという知らせは、全天にひろがった。琴は全部鳴りをひそめた。天使たちは悲しみのあまり、頭の冠を脱ぎすてた。全天は動揺した。罪を犯したふたりをどう処置したらよいかを決定するために、会議が開かれた。天使たちは、アダムとエバが命の木に手をのばしてその実を食べ、永遠の罪人になりはしないかと恐れた。しかし、神は、罪人たちを園から追放すると言われた。天使たちは、ただちに命の木にいたる道を守るように、命令を受けた。アダムとエバが、神に従わないで、神の不興をこうむったのちも、命の木の実を食べて、罪と不服従をいつまでも続け、罪を永遠に伝えようというのが、サタンのたくらんだ計画だった。しかし、聖天使たちが、命の木にいたる道をさえぎるためにつかわされた。これらの力強い天使たちは、おのおのその右手に輝く剣のようなものを持っていた。

こうしてサタンは勝利を収めた。彼は、自分の堕落によって、他の者たちを苦しみに陥れた。彼は天から閉め出され、彼らは楽園から閉め出されたのであった。（初代文集 259）

アダムとエバは、悪の知識を選んだ。もし彼らが、その失った地位を回復しようとすれば、それは、彼らが自ら招いた不利な事情の下に回復されなければならなかった。（教育 17）

神の大いなる憐れみのしるし

「主なる神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた。」（創世記 3:21）

へりくだりと言い表せない悲しみのうちに、アダムとエバは神のいましめに不従順になるまでは非常に幸福であった麗しい園を離れた。環境が変わり、罪を犯す前と同じではなくなった。神は彼らがさらされた肌寒さの感覚、その後の暑さの感覚から守るために、皮の着物を彼らに着せられた。

神の御使たちはこの堕落した夫婦を訪問し、彼らに、神の律法への違反のゆえに、これ以上彼らの聖なる地所、エデンの家庭を所有し続けることはできないが、彼らの場合は全く希望がないわけではないことを告げるのを委ねられた。神の御子は彼らの希望のない状態をご覧になって、あわれみに動かされ、彼らに当然与えられるべき罰をご自身に引き受け、キリストが提案なさる贖罪のうちに信仰によって彼らが生きることができるために、彼らのために自発的に死んでくださるのであった。希望の戸が開かれ、人はその大きな罪にもかかわらず、サタンの完全な支配下にいなくてもよいのである。彼に恩恵期間が与えられた。それは、その期間の間に、悔い改めと神の御子の贖罪を信じる信仰の生活によって、彼が御父の律法の違反から贖われることができ、このようにして、その律法を守るための御子の努力が受け入れられる立場にまで高められるためであった。

天使たちは、彼らが神の律法に違反したことを知らされたとき、天で感じられた悲しみを語った。そのことにより、キリストはご自身の尊い命を大いなる犠牲にする手段を取られたのであった。

アダムとエバが、神の律法がどれほど高められた聖なるものであるか、その違反が彼らを完全な滅びから救うためにそれほどまでに高価な犠牲を必要とするものであることを悟ったとき、彼らは、愛する神の御子がこの大きな犠牲を払うよりは、自分たちと後世の者が自分たちの違反の罰を耐えることができるようにしてほしいと嘆願した。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1879 年 1 月 30 日）

1月30日

なんと驚くべきへりくだり

「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。」（ヨハネ 1:14）

人のためのキリストのへりくだりは天使たちにとって驚くべきことであった。キリストを通じての贖罪は彼らにとって愛と知恵の神秘であり、創造のみ業よりも彼らの関心を奪った。それほどの愛は彼らを驚嘆させ、有頂天にさせた。それが非常に熱烈で無類の利己心の全くないものであったので、彼らはそれを理解することができなかった。初めに人の創造、天と地の構成、創造主が自然界全てを装われた美と栄光は、全天の驚きと感嘆、彼らの崇敬と愛を呼び起こした。しかし御座をベツレヘムのまぶねと取り替え、ご自身をあざけりと侮辱、貧困と残酷な死にさらす彼らの司令官のこのへりくだりは、輝く天の万軍から最高の熱愛と最も深い喜びを奮い起こした。彼らの喜びと賛美は、ベツレヘムの丘で羊飼いへの知らせでほとばしり出た。……

示し、魅了され、心を奪われ、最も深い喜びに満たされるべき者が心を動かされず、感動しなかった。この無関心は今日神に公に反抗する者だけでなく、キリストに従っていると公言するものの中にはっきりみえる。この人々はもっと大きい有罪判決を受ける。なぜならキリストは、このお方のみ旨に公然と反抗して立つ者によってよりも、み名を公言しながら、働きにおいてこのお方を否定する者によってはるかにもっと辱められるからである。キリストは、罪人の罪深い生活より、クリスチャンだと公言しながら、その生活が慎重でなく、公言する真理によって聖化されていない者よって辱めを受けられるのである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1909 年 7 月 15 日）

わたしたちに示されてきた偉大で広大な真理がもっと成し遂げない理由は、わたしたちがこの真理を生きないからである。それゆえそれらはわたしたちを感化する力がない。わたしたちは真理をもっと深く感謝する必要がある。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1900 年 5 月 2 日）

暗闇に輝く光線

「〔イエスは〕おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。（マタイ 1:21）

エデンにおけるアダムの違反の後、神がわたしたちにお与えになったキリストは、わたしたちが自分の罪のうちに救われるのではなく、わたしたちの罪から救っていただけるためであったが、それはわたしたちが神への忠誠に立ち返り、従順な子となるためであった。わたしたちが神の支配する御霊に自分の思い、魂、体、自分の全てを委ねるとき、そのとき真理の御霊はわたしたちと共におられる。…

神が、〔破られた〕神の律法の罰に苦しむために、わたしたちのために死ぬようにと、ご自分のひとり子を与えてくださったのは本当である。わたしたちはこのことをよく考え、熟考すべきである。わたしたちの頭脳が絶えず堕落した人類のためのこのお方の比類のない愛を考えるとき、わたしたちは、このお方を知るようになり、親しくなっていき、このお方の知識を持つようになる。そして、イエス・キリストがわたしたちの世界に来られたとき、このお方がどのようにご自分の王衣と王冠を脇へ置き、その神性に人性をまとわれたかを知るようになる。なぜならこのお方は、ご自分の貧しさによってわたしたちが富むものとなることができるために貧しくなられたからである。御父が御子をここにつかわされた。そして宇宙のこの小さな原子であるまさにこの世界で、人類がかつて知った中で最も壮大な光景が繰り広げられた。……

神は世にどのように正しくあらわされるべきであったか。このお方が愛の神、憐れみ、親切、同情に満ちたお方であることがどのように知られるべきであったか、世はこのことをどのように知るべきであったか、神が御子をお送りになった、そしてこのお方は神のご品性を世にあらわすべきであった。

サタンは神と人の間にちょうど入り込み、自分自身を置いた。人間の思いを脇へそらすのが彼の働きであり、神とわたしたちの世界にある道徳的暗闇、堕落、不法全体との間をわたしたちが識別できないように、自分の暗い影をわたしたちの道に投げかける。キリストは天におられ、天の光をもたらし、暗闇を追い返し、ご自身の栄光の日光を入れてくださる。そのときわたしたちは堕落と汚染と汚れのただなかに天の光を見る。（エレン・G．ホワイト 1888 年原稿 74, 75）

2月1日

反逆と誇りを捨てる

「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである。」(ヨハネ 4:24)

自己愛と利己的な野望は狭い門を通り、細く上に向かう道を歩むことはできない。最終的な清算の日には、神が一人びとりを名によって知っておられたことがわかるようになる。人生の一つ一つの行動に対して目に見えない証人がいる。「わたしはあなたのわざを知っている」と「七つの金の燭台の間を歩く」お方が仰せになる (黙示録 2:2,1)。どのような機会が軽視されてきたか、良い羊飼いであられるお方が曲がった道で、さ迷っている者を探し出し、彼らを安全で平安な道に連れ戻すためになされた努力はどれほどたゆまないものであったかが知られる。神は何度も何度も快楽を愛する者に呼びかけ、彼らが自分たちの危険を知り、逃れることができるように、何度も何度もみ言葉の光を彼らの道に投げかけてくださった。しかし、彼らはますます、あたかも広い道を旅するようにふざけたり、冗談を言ったりしながら進んでいき、ついには自分たちの猶予の期間が終わってしまうのである。神の道は公正であり平等である。だから欠けていることが見出された者に宣告が下されるとき、どの口も閉じる。……

あなたが永遠の事柄に正しい評価をするとき、金持ちや学識のある者の友情や評価があなたに感化力を及ぼすことはない。どのような形であれおのずと現われる誇りは、もはやあなたの心のうちに生きることはない。(教会への証 5 巻 435)

なされるべき大いなる働きがある。心を忠実に探らなければならない。さもなければ、誇りと反逆がその内で支配するようになる。外の悪が内にある悪を目覚めさせる。そして魂は、自分自身の造った霧の中でさ迷いながら、いつも自分のクリスチャンらしくない一連の行為の結果を他の人のせいにするのである。

生ける御言がわたしたちの内に豊かに宿らなければならない。さもなければ、わたしたちは決して自分の心のうちで主なる神をあがめることができない。わたしたちは御言によって生きなければならない。そして、自分が神を愛しているのか、それとも自分のうぬぼれに夢中になっているのかを知るために、綿密に自分自身を吟味しながら、自己を制御しなければならない。恵みによって抑制されていない心はどれも裏切るものであり、滅びへと導く。(レビュー・アンド・ヘラルド 1900 年 5 月 1 日)

捧げものにおける態度

「アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。日がたって、カインは地の産物を持ってきて、主に供え物とした。アベルもまた、その群れのういごと肥えたものとを持ってきた。主はアベルとその供え物とを顧みられた。しかしカインとその供え物とは顧みられなかった。」（創世記 4:2 ～ 5）

〔犠牲の捧げものには〕大きく分けて二つの部類があった。アベルは祭司として自分の捧げものを厳粛な信仰のうちに捧げた。カインは自分の地の実を捧げたいと思ったが、自分の捧げものに獣の血を結びつけることを拒んだ。彼の心は獣の血を捧げることによって、罪の悔い改めと救い主を信じる信仰を示すことを拒んだ。贖い主の必要を認めることを拒んだのである。彼の高慢な心にとってこれは依存であり、屈辱であった。

しかしアベルは未来の贖い主を信じる信仰によってカインよりもより受け入れられる犠牲を神に捧げた。彼が獣の血を捧げたことは、自分が罪人であり洗い流すべき罪が自分にあることを表明し、自分が悔い改め、未来の大いなる捧げものの血の功績を信じていることを表明した。サタンは不信仰、つぶやき、反抗の親である。彼は疑いと、罪を犯していない兄弟と神への激怒でカインを満たした。なぜなら彼の犠牲は拒まれ、アベルの犠牲は受け入れられたからである。……

犠牲の捧げものは、捧げられることになっていた大いなる捧げもの、すなわち獣の血で予表されていた捧げものを通して与えられる神の許しについて、人に対する永続的な誓約となるべく制定された。この儀式によって人は来るべき贖い主への悔い改め、従順、信仰を表した。カインの捧げものを神に対する侮辱としたのは、神のお定めになった儀式に対する服従と従順の欠如であった。彼は単に地の産物を神に捧げるという自分自身の計画の方が高尚であり、他への依存を示し、ひいては自分自身の弱さと罪深さを表明する獣の血の捧げものほど屈辱的ではないと考えた。カインは贖罪の血を軽んじた。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1874年３月３日）

2月3日

カインの精神を避ける

「カインは弟アベルに言った、『さあ、野原へ行こう』。彼らが野にいたとき、カインは弟アベルに立ちかかって、これを殺した。」（創世記 4:8）

不法がはびこるので多くの者の愛は冷える。キリスト再臨の信仰を失っている者が多くいる。彼らは世のために生きており、「主人の帰りがおそい」と心の中で言っており、そう願いつつ仲間の僕を打ちたたいている。彼らはカインがアベルを殺したのと同じ理由のゆえにこれを行う。アベルは神が与えておられた指示に従って神を礼拝する決心をしていた。これがカインを不快にした。彼は自分自身の計画が最高であり、主は妥協して彼の条件を受け入れると考えた。カインは自分の捧げものの中にキリストへの依存を認めなかった。自分の父親アダムはエデンから追い出されることで厳しく取り扱われていると考えた。思いの前にその罪をつねに保つという考え、自分の外にある権威への完全な依存の告白である、殺された小羊の血を捧げることは、カインの誇り高い精神にとって拷問であった。長子として、彼はアベルが自分の模範に従うべきであると考えた。聖なる火が犠牲を完全に焼き尽くしてアベルの捧げものが神に受け入れられたとき、カインの怒りは非常に大きくなった。主は彼に事態を説明するためにへりくだられたが、彼は神と和解しようとせず、神がアベルに好意を示されたので彼を憎んだ。彼は非常に怒って自分の兄弟を殺した。

主は、自分たちの不信仰と疑いによって、自分の主人の帰りは遅いと言ってきたすべての人々、そしてその僕仲間を打ちたたき、酒飲み仲間と食べたり飲んだりしている（彼らとまさに同じ原則で働いている）すべての者と争われる。彼らは酔っている、しかし酒のゆえではない、よろめく、しかし濃き酒のゆえではない。……

人が神から離れ、それにより彼の心は聖霊の支配する力の下にいなくなるや否や、サタンの属性が現れ、自分の仲間を圧迫し始める。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1900 年 3 月 21 日）

2月4日

わたしの兄弟の番人はだれか

「主はカインに言われて、『弟アベルは、どこにいますか』。カインは答えた、『知りません。わたしが弟の番人でしょうか』。」（創世記 4:9）

貪欲と利己心を伴った世的な精神が、多くの者を支配している。それを持っている者は自分自身の特別な関心を見張っている。利己的な金持ちは、いかに隣人の不利を自分が有利に用いられるかを研究するためでないかぎり、隣人の事柄に関心を示さない。人のうちにある気高さと神に似たものは利己的な関心のために手放され、犠牲にされている。金銭への愛着はすべての悪の根源である。それは視力を盲目にし、人を神と隣人に対する自分の義務を識別するのを妨げる。

ある者は、自分たちがときおり牧師や真理の前進のために進んで寄付をするので、自分は気前が良いとうぬぼれているが、これらのいわゆる気前の良い人々は、取引においてきめが細かく、だし抜く準備ができている。彼らはこの世のものを豊富に持っており、これは彼らを神の管理人として大きな責任に結びつける。しかしながら、貧しい勤勉に働く兄弟との取引のとき、彼らは一銭にいたるまで厳密である。取引の貧しい側が、貧しい人の遺産である。貧しい兄弟に好意を示す代わりに、鋭敏で厳密な金持ちはすべてを有利に用いて、すでに蓄えている富を他人の不運によって増し加える。彼は自分の利口さを自慢するが、自分の富をもって自らの上に重いのろいを積み上げ、自分の兄弟の道につまずきの石を置いているのである。

真実で気高く私心のない善意を、金持ちの中に見出すことは非常にまれである。彼らは富への野望の中で、人類の当然の要求を見落とす。彼らは、おそらくは自分たちと同じくらい一生懸命働いてきた貧困のうちにいる自分たちの兄弟の窮屈で好ましくない立場を認めることも感じることもできない。彼らは、カインのように「わたしは兄弟の番人でしょうか」「わたしは自分が持っているもののために一生懸命働きました。わたしはそれをはなしてはなりません」と言う。「兄弟の悲哀を感じるよう助けてください」と祈る代わりに、彼らの絶え間ない研究は、兄弟がどのような悲哀を持っているか、自分たちの同情や気前のよさをどのように要求するかを忘れることである。（教会への証1巻 479,480）

2月5日

カインでなくキリストの方法を選ぶ

「わたしたちは互に愛し合うべきである。これが、あなたがたの初めから聞いていたおとずれである。カインのようになってはいけない。彼は悪しき者から出て、その兄弟を殺したのである。なぜ兄弟を殺したのか。彼のわざが悪く、その兄弟のわざは正しかったからである。」（ヨハネ第一 3:11,12）

カインの精神、すなわち同胞を告発し、有罪を宣告し、獄に入れ、そして死刑に処するよう人々を導く精神が、わたしたちの世界にますます増大している。神のはっきりとした戒めの違反は、自分の同胞を傷つけるようにとのサタンの精神を吹き込まれている。なぜなら彼らは宗教上の信念で意見を異にするからである。彼らは人の手による律法を制定し、自分たちの残酷な発明によって、自分自身がしているかのように、人々にむりやり神を冒涜させようとしつつ、神の律法を無視する。しかし彼らはこれをする権利を与えられてはいない。宗教が異なるがゆえに自分たちの同胞に苦痛や死の判決をくだす者は、もし彼らが違反を続けるなら、ちょうど同じような判決を自分たちにくだすことになる。彼らは自分たちの働きによって、キリストが初臨されたときのように、再臨のときにもこのお方を拒み、死刑にするという証拠を担う。……

罪はサタンの属性であり、つねに善に敵対して団結する。カインの精神はすべての偽りの宗教において明らかである。サタンの働きは非難し滅ぼすこと、人の自由を取り去り、彼の命を滅ぼすことである。違反はつねに人々をサタンの代理人として行動させ、神と義に敵対する目的を行うようにと導く。

キリストは、ご自分の働きは回復し、道徳的に高め、平和と幸福をもたらすことであるとナザレでお告げになった。このお方は御父を表すためにこの世に来られ、死人に命を与えることによって、病人と苦しむ者に健全と健康を回復することによってご自分の神の力をあらわされた。このお方はこの世における命の木のようであられた。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1900 年 3 月 21 日）

信仰は愛によって働き、魂を純潔にするときだけ本物である。自己は十字架につけなくてはならない。さもなければ全存在が汚れたままである。カインの精神が心に入るのを許してはならない。なぜならそれがもたらす憎しみは最も近い近親者を殺すことになるからである。（ﾕｰｽ・ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ 1899 年 9 月 21 日）

2月6日

悔悟の犠牲

「信仰によって、アベルはカインよりもまさったいけにえを神にささげ、信仰によって義なる者と認められた。」（ヘブル 11:4）

ほとんど向上していない多くの者は慢心し、へつらいを熱望し、第一で最も重要と見なされないなら妬み、自分が他の人々に勝っているという感情を大事にする。しかし天が尊いものとして受け入れるのは、最もへりくだって働く者、神への感謝の気持ちで満たされている者、またアベルの捧げもののように自分の働きを芳しいものにする原則を、自分のなすすべてのことに織り込む者である。……

ぶどう畑で働く者よ、あなたの携わっている働きを神に受け入れられるものとするのは、それに携わる時間の長さではない。そうではなく、労していることに対する自発的な心、忠誠、誠心である。ユダヤ人はぶどう畑に最初に召された。しかし彼らは高慢でひとりよがりであり、彼らがまったく軽蔑していた異邦人が、神の王国の事柄において彼ら自身と同じ特権にあずかることで不快になった。ユダヤ人を何よりも怒らせたのは、使徒たちが、異邦人を探し求め、福音の光に導き入れるべきだと公表したことであった。労働者のたとえはユダヤ人が異邦人に対して行ったのと同じ精神を大事にすることがどれほど罪深いものであるかを示している。イエスは教会に最初に召された人々に、競走の精神は彼らの間で見出されてはならないと警告された。……

弟子たちの間には自己満足、自己称揚の精神があり、自分たちの間で比較していた。もし彼らのうちのだれかが目立って失敗をするなら、他の者は優越感に浸った。イエスは抑制しなければならない精神が入ってくるのをご覧になった。このお方は人の心を読むことがおできになった。そして、「何がいただけるでしょうか」という質問の中にある彼らの利己心の傾向をご覧になった。このお方はこの悪が巨大な規模になる前にそれを正さなければならない。弟子たちは福音の真の原則を見失う危険があった。……報いは働きによるのではない。だれも誇ることがないように、それはまったく恵みによるのである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1894年7月10日）

2月7日

神の聖なる人

「信仰によって、エノクは死を見ないように天に移された。神がお移しになったので、彼は見えなくなった。」（ヘブル 11:5）

エノクは聖なる人であり、一心に神に仕えた。彼は人類家族の堕落を悟り、カインの子孫から分離して、彼らの大いなる邪悪のゆえに彼らを譴責した。地上には、神を認め、このお方を畏れて礼拝している者がいた。しかし義なるエノクは、不信心な者の増し加わる邪悪に非常な心痛を覚え、彼らと日ごとに交わろうとしなかった。それによって彼らの不信心に影響を受け、自分が神の高貴なご品性に当然与えられるべき聖なる崇敬の念をもって、このお方をつねに尊敬しないことがありはしないかと恐れたのであった。彼の魂は、彼らが日々神の権威を踏みにじるのを見て苦しんだ。彼は彼らから離れ、熟考と祈りに捧げつつ、寂しい所で多くの時間を費やした。彼は神のみ前で待ち、このお方のみ旨をもっと完全に知り、それを実行できるようにと祈った。……

みずからを世から離し、祈りと神との交わりに多くの時間を割いていたエノクは、終わりの時代に世から離れている神の忠実な民をあらわしている。地上に不義は恐ろしいまでに広がるであろう。人々は自分たちの堕落した心のおもむくままに従い、自分たちの惑わせる哲学を実行し、崇高な天の権威に反抗するのをあきらめる。……彼らはエノクのように天に移されるのにふさわしくなる。彼らは世を教え警告しようと努力するかたわら、不信心者の精神や習慣に合わせず、自分たちの聖なる会話と信心深い模範によって彼らを責める。洪水によって世界が滅ぼされる直前に行われたエノクの昇天は、火による破滅に先立つ地からの生けるすべての義人の昇天を表す。聖徒たちは神の正しい戒めへの忠実な服従のゆえに、彼らを憎んでいた者たちの面前で栄光を与えられる。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1879 年 2 月 20 日）

目的のために隠遁（いんとん）生活を求める

「〔エノク〕が移される前に、神に喜ばれた者と、あかしされていたからである。」（ヘブル 11:5）

エノクは、神が預言の霊によって彼にあらわされたすべてのことを人々に詳しく話した。ある者は彼の言葉を信じて、自分たちの悪をやめ、神を畏れて礼拝した。そのような人々は、しばしば隠れ家にいる彼を探し求めたので、エノクは彼らに教え、神がご自分の御心の知識を彼らに与えてくださるようにと彼らのために祈った。ついに彼は隠遁のために一定の期間を選び、人々が彼を見つけるのを許さなかった。なぜなら彼らは神とのエノクの聖なる瞑想と交わりを妨げたからである。彼は自分を愛し、その知恵の言葉を聞く人々の社会をつねに締め出したのでも、堕落した人々から自分自身を全く引き離したのでもなかった。定まった時に義人や悪人に会い、不信心者に彼らの悪いふるまいに背を向けさせるよう労し、神を畏れるようにと教え、そのかたわら神の知識をもっている者にはもっと完全に神に仕えるようにと教えた。彼は自分の信心深い会話と聖なる模範によって彼らに益をあたえることができるかぎり彼らのところにとどまった。そしてそれから、神との交わりに飢え渇き、神だけが彼に与えることのできる聖なる知識を求めて孤独な場所にとどまるために、一定の期間すべてのつきあい―義人、あざける者、偶像礼拝者―から身を引いた。

エノクは神との交わりの間ますます神聖に成長しつづけた。彼の顔は、彼の知恵の言葉を聞こうとする人々を教えている間も彼の表情に残っている聖なる光に輝いていた。彼の天来の威厳のある様子は人々に畏敬の念をあたえた。主は、エノクがご自分に忠実に従い、不法を嫌悪し、このお方のみ旨の知識を実践することができるようにますます完全な知識を求めたので、彼を愛された。彼は、自分が畏れ、崇敬し、敬慕している神に自分をなおもますます近く結びつけることを切望した。主はエノクが他の人々のように死ぬのをお許しにならず、彼を死を見ないで天に携え上げるようにと、天使をつかわされた。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1879 年 2 月 20 日）

2月9日

神に喜ばれる信仰

「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自分を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。」（ヘブル 11:6）

救いに必要なのはただ信仰を持つことであり、働きは何の意味もなく、不可欠なものは信仰だけであると主張する者が、クリスチャン世界に多くいる。しかし神の御言は、働きのない信仰は死んだものであるとわたしたちに告げる。多くの者が神の戒めに従うことを拒んでいながら、信仰は大いに論じる。しかし信仰には土台がなければならない。

神のみ約束はみな条件をもとにしてなされている。もしわたしたちがこのお方のみ旨をなし、真理に歩むなら、そのとき、わたしたちは自分の願うことを求めることができ、それがわたしたちになされるのである。わたしたちが従順であるために真剣に努力している間は、神はわたしたちの嘆願をお聞きになる。しかし神は不従順であるわたしたちを祝福なさることはない。もしわたしたちがこのお方の戒めに不従順であることを選ぶなら、わたしたちは「信仰、信仰、信仰だけ」と叫ぶことはできるが、その応えは「行いを伴わない信仰のむなしい」（ヤコブ 2:20）という神のたしかなみ言葉が返ってくる。そのような信仰はただやかましい鐘や騒がしい鐃鉢と同じである。神の恵みの益を受けるために、わたしたちは自分の分を果たさなければならず、忠実に働き、悔い改めの実を結ばなければならない。

わたしたちは神と共なる働き人である。あなたは主人であるお方のための偉大な働きをするために、何か偉大な機会を待ちながら怠惰に座っているべきではない。あなたの通り道に直接おかれている義務をなおざりにすべきではない。そうではなく、あなたの周りに開いているささいな機会を活用すべきである。（信仰と働き 47）

あなたは、神のみ摂理があなたに割り当てておられる働きに、心から忠実に取りかかり、人生のより小さい働きにも最善を尽くしていかなければならない。ささいなことであっても、もっと大きな働きをなすときの徹底さを尽くしてなさなければならない。あなたの忠実さは天の記録の中で是認される。あなたは自分の前の道が平らになるのを待つ必要はない。あなたに委ねられたタラントを活用するために働きに出なさい。世があなたをどのように思うかは関係ない。あなたの言葉、あなたの精神、あなたの行動が、イエスのための生きた証となるようにしなさい。そうすれば主は、ご自分の栄光のための証が、よく秩序立てられた生活と信心深い会話を備えて、深くなり、力を増し加えるよう、責任を負ってくださる。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1890 年 6 月 16 日）

2月10日

働きによって示されたノアの信仰

「信仰によって、ノアはまだ見ていない事がらについて御告げを受け、恐れかしこみつつ、その家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世の罪をさばき、そして、信仰による義を受け継ぐ者となった。」（ヘブル 11:7）

ノアの時代の人々は鋭敏な知性を持っており、彼の預言が成就するのは不可能であると、科学的な根拠に基づいて示そうと努力した。ノアは自分の警告のゆえにあざけりを受け、狂信者とみなされた。ノアの神を信じる絶対的な信頼は、それが彼らを責める間たえず、彼らをいらだたせた。しかし彼らはこの忠実な警告者をその立場から動かすことはできなかった。主がこの警告をお与えになったのであり、ノアにとってはそれで十分であった。神のメッセージが彼の耳に鳴り響いているとき、哲学者の議論は彼にとって無であった。……

畏れに動かされて、ノアは家族を救うために箱舟を準備した。彼は一人びとりのクリスチャンを特徴づけるべき畏れを持っていた。ノアの完全な信仰は彼の畏れを増した。人と獣の上に、また地の上に降りかかる神のせまりくる怒りは、彼に箱舟を準備させた。彼の信仰そして神の怒りへの畏れは従順を生み出した。ノアは神に従うのを躊躇しなかった。彼は、箱舟を建造するのは大仕事であり、費用がかかるという言い訳をしなかった。彼は神を信じ、自分の所有するすべてを箱舟に注ぐその一方で、邪悪な世界はあざけり、惑わされた老人を笑った。

彼らには自分たちの不信仰とあざけりの機会が多くあった。なぜなら神はご自分の目的をただちに実行なさらなかったからである。しかし時の経過がノアの信仰をゆるがせることはなかった。彼の神への信頼は衰えることなく、つぶやくことなく、必然的に含まれる辛苦と犠牲を受け入れた。行動と結びついたノアの信仰は世を責めた。なぜなら彼は悪人たちを譴責し警告し忠告する義の忠実な説教者だったからである。彼らの非難と悪口は時々ほとんど耐えがたかったが、父祖は自分の魂を神にとどめ、自分の大いなる必要のなかでこのお方に助けを求めた。嘲笑、侮辱、からかいの中を、彼は果たすべき大いなる使命を持つ人としてそこかしこへと出ていった。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1879 年 2 月 27 日）

2月11日

ノアが持っていたような力強さ

「そして、ノアの時にあったように、人の子の時にも同様なことが起るであろう。ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていたが、そこへ洪水が襲ってきて、彼らをことごとく滅ぼした。」（ルカ 17:26,27）

〔ノアは〕自分がその堕落した同世代の一般大衆のさげすみとあざけりの対象であることを知っていた。しかし自分を取り巻く不法が大きくなればなるほど、彼は、自分の服従においてますます熱心で、堅固で、辛抱強くなり、神に真実であろうとするひとりの人が世にいることを示した。彼は神への忠実で確固たる証人であり、すべての人に親切で礼儀正しく、侮辱に対して腹を立てなかった。いたるところで彼を迎えるののしり、不敬な言動を聞かない人のようであった。……

ノアは祈りの人であった。そして、神とのこの密接な交わりの中で、彼は自分の勇気と堅固さをことごとく見出した。彼は人々に説教し、警告し、懇願した。しかし彼らは自分たちの進路を変えようとしなかった。彼らは買い、売り、植え、建て、めとり、とつぎ、宴会と大食にふけり、ノアのメッセージに軽蔑を示しながら、自分たちの魂を低下させた。彼らの言葉と行動は、彼らの猶予期間が終わりに近づくにつれて、ますます卑しくなり堕落していった。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1879 年 2 月 27 日）

自分本位、世の常習行為との一致の同じ精神が、ノアの時代のようにわたしたちの時代にも存在する。神の子であると公言する多くの者が、自分たちの公言を偽りとする熱心さをもって世的なことを追及する。彼らは自分たちの猶予期間の最後の瞬間まで植え、建て、買い、売り、食べ、飲み、めとり、とついでいるであろう。これがわたしたち自身の民の大部分の状態である。（教会への証 5 巻 10）

感謝なことにすべての者が肉の安全というゆりかごの中で眠るようにと揺り動かされているわけではない。時のしるしを識別する忠実な者がいる。現代の真理を公言している大部分の者が自分たちの働きで自分たちの信仰を否定する一方で、最後まで耐える者がいる。（教会への証 5 巻 10）

アブラハムは天の国を求めた

「信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った。信仰によって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。」（ヘブル 11:8,9）

神がアブラハムをお用いになる前に、彼は過去の交際から離れなければならなかったが、それは彼が人間の感化力に支配されず、人間の助けに頼らないでいられるためであった。神と結びついている今、この人はこれからは見知らぬ人々の間で暮らさなければならない。彼の品性は特別で世のすべての人とは異なっていなければならない。彼は自分の行動の方向を友人たちが理解できるように説明することすらできなかった。なぜなら彼らは偶像礼拝者だったからである。霊的な事柄は霊的に説明されなければならない。それゆえ彼の動機と行動は、彼の親族と友人たちの理解を超えていた。……

まさにアブラハムのような信仰と確信を、今日神の使者たちは必要としている。しかし主がお用いになることのできる多くの者は、他のすべてに勝るひとつのみ声に聞き従いつつ前進しようとしない。親族や友人とのつながりは、あまりにしばしば神の僕に非常に大きな感化力を持っているので、神は彼らにほとんど教えを与えることができず、ご自分の目的の知識を彼らに知らせることがほとんどおできにならない。そしてしばしば、しばらく後にこのお方は彼らを脇へやり、その場所に他の者を召し、彼らを同じ方法で試し、テストされる。主は、ご自分の僕らが完全にご自分に献身し、親族や他のすべての地上の交際のきずなにまさって主の奉仕を尊重するなら、彼らのためにもっと多くのことをなさるのである。（教会への証 4 巻 523,524）

〔アブラハムが〕サラを葬ったとき、彼は死者を埋葬する一片の土地すら所有していなかった。彼はそれを買わなければならなかった。しかし主が、彼の前に不死の生涯、また彼の家庭となるべき、清められたこの地上の光景を開かれたとき、彼は満足した。わたしたちの一人びとりの場合もそうである。わたしたちはこの世では巡礼者、他国人である。わたしたちは、アブラハムが望み、神がその建設者、造り主であられるその都を求めている。（原稿ﾘﾘｰｽ 10 巻 120,121）

2月13日

働いたアブラハムの信仰

「信仰によって、アブラハムは、試錬を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。」（ヘブル 11:17）

神がアブラハムの信仰を是認なさった証拠として、このお方は彼に「信仰の父」という名をお与えになった。アブラハムの模範は彼の信仰を持っている子らの益のために、聖なる歴史の中に記録されている。この信仰の大いなる行為は、神を信じて疑わない確信、このお方のご要求への完全な服従、神のご意志への全くの明け渡しの教訓を教える。わたしたちは、自分たちの所有するものは何も神へお捧げするのに高価すぎるものはないことを、アブラハムの模範の中で教えられる。……

人間の判断力では、アブラハムに与えられたご命令は過酷で、人間の力で耐えるにはあまりに大きすぎると考えるかもしれない。アブラハムの強さは、神からのものであった。彼は死すべき人間の視力で見える事柄ではなく、永遠の事柄を見た。神は、ご自分が神聖な同情と無限の愛のうちに人にお与えになった以上のものを、アブラハムに要求されたのではなかった。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1879 年 4 月 3 日）

今神を信じると公言し、クリスチャンとして通用している者のうち、神が自己を否定し、彼らの最愛の宝をこのお方に譲るようにと命じられるとき、どれほど多くの者がこのお方のみ声に従わないことであろうか。彼らは躊躇し、地上のものにしがみつく。彼らの愛情は世と世の事柄の上にあり、まさにこのような人々のうちのある者は、自分たちが真理に従うためにどれほど多くのものを犠牲にしてきたかを最も多く語るのである……

真理を公言し、世を愛する半分も神を愛さない者が多くいる。神は彼らをテストし、試しておられる。世と富への彼らの愛は彼らの思いを暗くし、彼らの判断を歪め、彼らの心をかたくなにする。神は、少なくとも彼らのうちの何人かにご自分の意志をあらわし、彼らのイサクをご自分に捧げるようにと命じられた。しかし彼らは従うことを拒み、黄金の機会は過ぎ去ってしまった。尊い時間は永遠に向けて、果たされなかった義務や明白な怠慢の記録の証言をする。わたしたちのもっているものは、神に明け渡されない限り、真の価値はない。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1875 年 4 月 1 日）

モーセの信仰

「信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。」（ヘブル 11:24 ～ 26）

モーセは自分のものとする信仰を持っていたので、神に完全に信頼していた。彼は助けを必要としていた。そして、そのために祈り、信仰によってそれをつかみ、神が自分をかえりみて下さるという確信を自分の経験に織り込んだ。彼は、神が自分の人生を特に支配しておられると信じた。彼は自分の人生の細部にわたって神を見、このお方を認め、自分はすべてをご覧になるお方、動機を量るお方、心を試されるお方の目の前にいると感じた。彼は神を仰ぎ、どのような形の誘惑にも堕落しないように自分を支えてくれる力を求めて神に信頼した。彼は特別な働きが自分に割り当てられていることを知っており、その働きをできる限り完全に成功させることを望んだ。しかしこれは神の助けがなければできないことを彼は知っていた。なぜなら、彼が扱う民は強情な民であったからである。神のご臨在は、人が置かれ得る最も苦しい状況を通じて彼を支えるのに十分であった。

モーセは単に神のことを考えたのではなく、このお方を見た。神は彼の前にたえず見えており、彼は決してそのみ顔を見失うことはなかった。彼はイエスを自分の救い主として見、救い主の功績が自分に着せられることを信じた。この信仰はモーセにとって当て推量ではなく、現実であった。これはわたしたちが必要としている信仰の種類であり、テストに耐える信仰である。ああ、わたしたちは目をイエスに留め続けていないために、どれほどしばしば誘惑に屈することであろうか。わたしたちの信仰が継続しないのは、自己放縦を通して、罪を犯すからであり、そのときわたしたちは「見えないかたを見ているように」することに耐え得ないからである（ヘブル 11:27）。

兄弟よ、キリストを日々、毎時間あなたの連れ合いとしなさい。そうすればあなたは自分に信仰がないとつぶやくことはない。キリストをじっと見つめなさい。このお方の品性を注意深く見なさい。このお方のことを話しなさい。あなたが自己を高めるのを少なくすればするほど、イエスのうちに高めるべきものをますます見るようになる。神はあなたが行なうための働きを持っておられる。主を絶えずあなたの前に置きなさい。（教会への証 5 巻 651,652）

2月15日

つり合わないくびきを共にしない

「あなたは他の神を拝んではならない。主はその名を『ねたみ』と言って、ねたむ神だからである。おそらくあなたはその国に住む者と契約を結び、彼らの神々を慕って姦淫を行い、その神々に犠牲をささげ、招かれて彼らの犠牲を食べ、またその娘たちを、あなたのむすこたちにめとり、その娘たちが自分たちの神々を慕って姦淫を行い、また、あなたのむすこたちをして、彼らの神々を慕わせ、姦淫を行わせるに至るであろう。」（出エジプト 34:14-16）

あなたが、決して影の晴れることのない家庭を持ちたいと思わない限り、自ら神の敵であるものと結びついてはならない。……

主は古代イスラエルに、彼らの周りにいる偶像礼拝者と婚姻関係にならないようにとお命じになった。「また彼らと婚姻をしてはならない。あなたの娘を彼のむすこに与えてはならない。かれの娘をあなたのむすこにめとってはならない。……それは彼らがあなたのむすこを惑わしてわたしに従わせず、ほかの神々に仕えさせ、そのため主はあなたがたにむかって怒りを発し、すみやかにあなたがたを滅ぼされることとなるからである。」（申命記 7:3,4）……

あなたはこれらのはっきりとした疑いようのない指示をあえて無視するのであろうか。神の子として、キリストの王国の臣民として、このお方の血で買われた者として、あなたはこのお方の主張を認めず、その御霊によって支配されない者と自分をいかに結びつけることができようか。……あなたは滑らかで快い言葉を聞き、すべてが好都合であると信じるように導かれるが、あなたはこれらの都合の良い話をする動機を読むこと、その心の中に隠された悪意の深さを知ることはできない。サタンがあなたの魂のために用意している光景の背後を見、そのわなをはっきりと見ることはできない。彼は、あなたに向かって誘惑の矢を向けるためにたやすく近づくことのできる進路をあなたが取るよう導きたいと思っている。神がご自分の僕の思いに働きかけておられる一方で、サタンは不従順の子らを通して働く。キリストとベリアルの間に一致はない。両者は調和することはできない。不信心者とつながることはあなた自身をサタンの陣地に置くことになる。あなたは神の御霊を深く悲しませ、このお方の守りを失う。あなたは永遠の命のための戦いを戦っているときに、自分に敵対するこのように恐ろしいよけいなものを持つ余裕はあるであろうか。（教会への証 5 巻 363 ～ 365）

普通のわな

「あなたがたは心が迷い、離れ去って、他の神々に仕え、それを拝むことのないよう、慎まなければならない。」（申命記 11:16）

過去数年間、神の民の危険は世への愛であった。ここから利己心と貪欲の罪が芽生えた。彼らはこの世のものを得れば得るほどそれに愛情を注ぎ、なおももっと求めて手を伸ばす。天使は言った。「富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」（ルカ 18:25）。しかしわたしたちが世に警告の最後の通告をしていることを信じると公言する多くの者が、富んでいる者が王国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方がもっとやさしい立場に自分を置こうと、全エネルギーを用いて努力している。……

サタンは、真理を公言する者に固有の利己的な貪欲な気質を眺め、彼らの道に繁栄を投げかけ、彼らに地の富を提供することによって彼らを誘惑する。もし彼らが生来の気質に打ち勝たないなら、彼らは富を愛し、自分の偶像を拝むことによってつまずき、堕落することをサタンは知っている。サタンの目的はしばしば達成されている。世への強い愛が真理への愛に勝つかそれを飲み込む。世の王国が彼らに差し出され、彼らは熱心に自分の宝をつかみ、自分は素晴らしく栄えていると考える。サタンは自分の計画が成功したので勝ち誇る。彼らは世への愛のために神への愛をあきらめる。

わたしは、このように栄えている者が神の祭壇に自分の財産をすべて置くことによって利己的な貪欲に打ち勝つなら、彼らはサタンの計画を挫折させることができるのを見た。そして真理のみ事業を進展させ、やもめ、みなしご、苦しむ者を助けるために、どこで財産が必要とされているかが彼らにわかるとき、喜んで差し出し、このようにして天に宝を積む。

真の証人の勧告に聴き従いなさい。富む者となるために、火で精錬された金を買いなさい。身につけるために、白い衣を買いなさい。見えるようになるため、目薬を買いなさい。何らかの努力をしなさい。（教会への証 1 巻 141,142）

2月17日

過去から学ぶ

「わが民よ、聞け、わたしはあなたに勧告する。イスラエルよ、あなたがわたしに聞き従うことを望む。あなたのうちに他の神があってはならない。あなたは外国の神を拝んではならない。」（詩篇 81:8,9）

わたしたちは最も厳粛な時代に生きている。わたしに与えられた最後の幻の中で、今真理を公言する人々のうち一部の人しか、それによって清められず、救われないという驚くべき事実を、わたしは示された。多くの者が働きの単純さを越え、世に順応し、偶像を大事にし、霊的に死んでいる。イエスに従う、へりくだった、自己犠牲をしている者は、無関心な者、世を愛する者を後ろに残して、完全へと進んでゆく。

わたしは古代イスラエルを指し示された。エジプトを離れた大軍の成人は二人しかカナンの地に入らなかった。彼らの死体は彼らが罪を犯したがゆえに荒野に撒き散らされた。現代のイスラエルは神を忘れ、その古代の民以上に偶像礼拝に導かれる危険がもっと大きい。安息日遵守者であると公言する者によってすら、多くの偶像が礼拝されている。神は古代の民に偶像崇拝を警戒するようにと特に指令なさった。なぜならもし彼らが生ける神に仕えることからそらされるなら、このお方ののろいが彼らに注がれるからであり、その一方で、もし彼らが心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くしてこのお方を愛するなら、かごいっぱい、蔵いっぱいになるまで彼らを豊かに祝福し、彼らのただ中から病を取り除かれるからである。

今神の民の前に祝福とのろい―もし彼らが世から出て分離し、へりくだった従順の道を歩むなら、祝福が、もし彼らが天の気高い要求を踏みにじる偶像礼拝者とつながるなら、のろい―がある。反抗的なイスラエルの罪と不法は、もしわたしたちが彼らの違反の模範をまね、神から離れるなら、彼ら同様わたしたちも必ず堕落するという警告として記録されており、その状況はわたしたちの前に提示されている。「これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである」（コリント第一 10:11）。

2月18日

世を動かす力

「ただ大きな力と伸べた腕とをもって、あなたがたをエジプトの地から導き上った主をのみ敬い、これを拝み、これに犠牲をささげなければならない。またあなたがたのために書きしるされた定めと、おきてと、律法と、戒めとを、慎んで常に守らなければならない。他の神々を敬ってはならない。」（列王記下 17:36,37）

わたしたちは〔神の〕被造物、そのみ手のわざであるので、このお方は崇敬、光栄、愛をお受けになる権利がある。わたしたちはこのお方への従順によってのみ自分の愛を証明することができる。もしこのお方がわたしたちの畏れであるなら、わたしたちはこのお方に栄と栄光を帰すよう努め、そのみ旨を行うことに最高の幸福を見出す。このお方への快い従順を捧げるのに失敗することは何であっても、このお方へのわたしたちの愛は偽りであることを示す。……

クリスチャンであると公言する者が余りにしばしば自分たちの造り主への義務を忘れる。彼らは十字架を心配してこのお方の戒めへの従順をあらわすことにより主をあがめるのを怠る。そしてキリストに従っていると公言する非常に多くの者が自分たちの生活の中でそのご品性を表さないので、宗教は誤解され、不信心者に軽蔑される。クリスチャンが絶えず神の律法に違反するので、キリスト教はその力を失う。なぜなら、利己心が見られ、偶像礼拝と貪欲があらわされるからである。

キリストに真に従う者は神の戒めをこのお方が守られたように守る。もし彼らが真心からこのお方を自分の個人的な救い主として受け入れるなら、彼らは神に対する自分たちの義務を果たし、品性にこのお方をあらわしたいとの熱心な願いにより動かされるようになる。そしてもし律法に完全に従っていたなら、地はその住民のもとに今のように堕落してはいなかったのである。圧迫と不正は存在せず、愛、調和、喜びが見られたことであろうに。キリスト教の力が教会の中に現れ、世にはキリストに従う者を矛盾で責める原因はなかったであろうに。聖霊の改心させる力が感じられ、幾千もの人々が救われるべき者としてそのような教会に加えられていたことであろうに。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1897 年 3 月 4 日）

2月19日

一瞬たりとも失ってはならない

「わたしの名をもってとなえられるわたしの民が、もしへりくだり、祈って、わたしの顔を求め、その悪い道を離れるならば、わたしは天から聞いて、その罪をゆるし、その地をいやす。」（歴代志下 7:14）

われわれは世界歴史の最も厳粛な時代に生存している。地上のおびただしい数の人々の運命が、決定されようとしている。われわれ自身の将来の幸福も、他の魂の救いも、今われわれが歩いている道にかかっている。われわれは真理のみ霊によって導かれる必要がある。キリストに従う者はみな、「主よ、わたしは何をしたらよいでしょうか」と熱心にたずねるべきである。われわれは祈りと断食をもって主の前にへりくだり、主のみ言葉について、特にさばきの光景について瞑想する必要がある。われわれは今、神のことについて、深い、生きた経験を求めなければならない。一刻もむだにはできない。われわれの周囲には重大な事件が起こっており、われわれはサタンの魔法の働いている場にいるのである。神の見張り人たちよ、眠ってはいけない。敵は近くに忍び込んでいて、あなたが気をゆるめて眠気を催すならば、いつでも飛びかかってえじきにしようと待ち構えている。

多くの者は、神の前における自分の真の姿について欺かれている。彼らは自分たちは悪事を行なっていないと喜んでいるが、神が彼らに要求され、しかも彼らが実行することを怠った、善にして高潔な行為のことを数えるのを忘れている。彼らは神の園の木であるだけでは十分ではない。彼らは実を結ぶことによって神のご期待に答えなければならない。自分を力づけてくれる神の恵みを通してなすことができたはずの善行をしなかった責任を、神は問われる。彼らは地をふさぐものとして天の書に記録される。しかし、この種の人の場合も、全く絶望的というわけではない。神の恵みを軽視し、神の恵みを悪用したこれらの人々に、忍耐深い愛の神のみ心は、「『眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう。』そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、……今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである」と訴えておられる（エペソ 5:14 ～ 16）。（各時代の大争闘下巻 368,369）

聖潔の美

「神の子らよ、主に帰せよ、栄光と力とを主に帰せよ。み名の栄光を主に帰せよ、聖なる装いをもって主を拝め。」（詩篇 29:1,2）

神の栄光のために非常に熱心であること、また、あたかも神のご要求がわたしたちの自由に対する制限でもあるかのように、悲しい表情や無分別な言葉によってさえも、悪い評判をもたらしたりしないことは、わたしたちの義務である。この悲しみ、失望、罪の世においてさえ、主はわたしたちが快活でご自分の力強さにあって力強いことを望んでおられる。わたしたちは、容貌において、気質において、言葉において、品性において、神の奉仕はよいものであると証すべきである。わたしたちはこのようにして「主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ」と宣布する（詩篇 19:7）。

わたしたちの宗教の明るく快活な側面が、日々神に献身しているすべての者によってあらわされる。わたしたちは悲しく思われる試練を嘆かわしく語ることによって、神を辱めてはならない。教育者として受け入れられるすべての試練は、喜びを生み出す。宗教生活全体が高められ、上げられ、気高くされ、よい言葉と働きを伴った香りとなる。敵は魂が落胆し、がっかりし、悲嘆にくれ、うめいていると非常に喜ぶ。彼は、わたしたちの信仰の結果がちょうどそのような印象になることを望んでいる。しかし神は、思いが低い水準を手に入れるのを望んでおられない。このお方はそれぞれの魂が、贖い主の支えの力のうちに勝利することを望んでおられる。（教会への証 6 巻 365,366）

信仰と働きは手に手をとって進む。それらは打ち勝つ働きで調和のとれた行動をする。信仰のない働きは死んだものであり、働きのない信仰も死んだものである。働きは決してわたしたちを救わない。それはわたしたちのために役立つキリストの功績である。キリストを信じる信仰によって、このお方はわたしたちの不完全な努力をすべて神に受け入れられるものとしてくださる。わたしたちが持つようにと要求されている信仰は、何も行わない信仰ではない。救う信仰は愛によって働き、魂を清めるものである。怒りや疑いなしに神に聖なる手を上げる者は神の戒めの道を聡明に歩む。（信仰と働き 48,49）

2月21日

栄光を主に

「もろもろの民のやからよ、主に帰せよ、栄光と力とを主に帰せよ。」（歴代志上16:28）

臆病によって、あるいは神の戒めを守る民であることが知られるのを恐れることによって、得るものは何もない。わたしたちの光を、あたかも自分たちの信仰を恥じているかのように隠すことは、ただ悲惨な結果に終わるだけである。神はわたしたち自身の弱さにまかせてそのままになさる。主がわたしたちを召されるいかなる場所においても、わたしたちが自分たちの光を輝かせるのを拒むことを、主がお許しにならないように。もしわたしたちが自分自身の考えと計画に従い、イエスを後にして、あえて自分自身で出て行こうとするなら、不屈の精神や勇気あるいは霊的な力を得ることを期待できない。神は道徳的英雄－このお方の特別な民であることを恥としない人々－を持っておられたし、また今も持っておられる。彼らの意志と計画はみな神の律法の下に従属している。イエスの愛は、彼らが自分たちの命を自分になくてはならないものと見なさないように導いてきた。彼らの働きは、神のみ言葉から光を捉え、それをはっきりとした不変の光線として世に輝かせることであった。「神への忠誠」が彼らのモットーである。（教会への証 5 巻 527,528）

自分の愛情が神にとどまっている人々は成功する。彼らはキリストのうちに自己を見失い、世的な魅力は、彼らをその忠誠から引き離そうとそそのかす力を失う。彼らは外面的な見せびらかしが力を与えないことを悟る。神の選ばれた民として、わたしたちがなすべき働きを正しくあらわすのは、誇示でも、外面的な展示でもない。……

神の奉仕にかかわっているすべての人は、見せたいとねがう願望によって、他の人を放縦や自己の栄光へ導くことがないように防御しなさい。……この時代のための真理を信じると公言する人々が主の道に歩み、正義と公道を行っているかぎりは、主が彼らに繁栄を与えてくださることを期待することができる。しかし、彼らが狭い道からそれることを選ぶなら、彼らは自分自身と導きを求めて彼らを見ている人々に破滅をもたらすのである。（教会への証 7 巻 90,91）

あなたは栄光をほんのわずかといえども持っていってはならない。そうではなく、あなたは神に栄光を帰し、そのみ働きに携わるすべての人が、成功の秘訣はキリスト・イエスにあることを理解するのを助けるよう努めるべきである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1887 年 5 月 19 日）

神のみ旨に明け渡す

「さあ、われらは拝み、ひれ伏し、われらの造り主、主のみ前にひざまずこう。主はわれらの神であり、われらはその牧の民、そのみ手の羊である。どうか、あなたがたは、きょう、そのみ声を聞くように。あなたがたは、……心をかたくなにしてはならない。」（詩篇 95:6 ～ 8）

わたしたちは真理の知識を持つだけでは十分ではない。愛のうちに歩み、働き、神のみ旨にわたしたちの意志を一致させなければならない。……

わたしたちが自分たちのうちに神のみ旨をなしていただくならば、罪を心にいだくことはない。清めの炉の中で、すべてのかすは燃やし尽くされる。

聖霊がペンテコステの日に下ったとき、それは力強い突風のようであった。それは少しも制限されなかった。なぜなら、弟子たちが座していた場所に満ちたからである。わたしたちの心がそれを受ける準備ができたならば、今もそのように与えられるのである。

すべての教会員は神のみ前にひざまずき、御霊を与えてくださるように熱烈に祈ろう。「主よ、わたしの信仰を増してください。わたしにあなたのみ言葉を理解させてください。なぜなら、主のみ言葉は光を与えるからです。あなたのご臨在によってわたしを新たにしてください。わたしの心をあなたの御霊で満たし、キリストがわたしを愛されたように、わたしが兄弟たちを愛することができるようにしてください」との声を上げなさい。

神は自らを奉仕のために備える人々を祝福してくださる。彼らは御霊の保証を持つということがどういうことかを悟るようになる。なぜなら、彼らはキリストを信仰によって受け入れたからである。キリストの宗教は罪の許し以上のことを意味する。それは罪が取り除かれて、その空いたところが御霊で満たされることを意味する。それは思いが神の光によって照らされ、心から自己がなくなり、キリストのご臨在で満たされることを意味する。この働きが教会員のためになされるとき、教会は生きた働く教会となる。

わたしたちは一つの思い、一つの目標になるよう、最も熱心に努めるべきである。聖霊のバプテスマ、ただこれだけがわたしたちをその地点にまで到達させることができる。わたしたちは大きな働きがわたしたちのためになされるように、自己放棄によって聖霊を受けるために自分たちの心を整えようではないか。そのとき、わたしたちは、「わたしのしていることをご覧なさい」とは言わずに、「神のいつくしみ深さと愛をご覧なさい！」と言うことができる。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1902 年 6 月 10 日）

2月23日

心の聖地

「われらの神、主をあがめ、その聖なる山で拝みまつれ。われらの神、主は聖でいらせられるからである。」（詩篇 99:9）

わたしたちはイエスのみ足の跡に歩みたいであろうか。ナザレやベタニヤ、またエルサレムの道を探す必要はない。わたしたちは病床や苦しむ人類のかたわらに、貧困に打ちのめされ悩まされている者のあばら屋にイエスの足跡を見出すのである。わたしたちはこれらの足跡に歩み、苦しんでいるものを慰め、落胆した人に希望と慰めの言葉を語ることができる。イエスが地上におられたときになさったようにすることにより、わたしたちはこのお方の祝福されたみ足の跡に歩むのである。イエスは「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と言われた（ルカ 9:23）。罪ののろいを受けた地がすべての罪のしみから清められるとき、オリブ山が二つに裂けて、広大な平野となるとき、神の都がその上に下ってくるとき－今聖地と呼ばれている地がほんとうに聖なるものとなる。しかし、神のみ事業と働きは、エルサレムに巡礼することによって前進することはない。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1896 年 6 月 9 日）

神の要求を一つでも故意に犯していながら、清くなれると信じて、自分を欺いてはならない。罪と知りながらそれを犯すことは、聖霊のあかしの声を沈黙させ、魂を神から引き離すものである。「罪は不法である。」そして、「すべて罪を犯す者〔律法を犯す者〕は、彼を見たこともなく、知ったこともない者である」（ヨハネ第一 3:6）。ヨハネは彼の手紙の中で、愛についてくわしく述べたのであるが、しかしまた、神の律法を犯す生活をしながら清められたと主張している人々の正体を、摘発することを躊躇しなかった。『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである」（ヨハネ第一 2:4, 5）。ここに、すべての人の信仰の告白を試みる試金石がある。天においても地においても、清めに関する神の唯一の標準によって量るのでなければ、だれひとり、清い人であるとはいえない。（各時代の大争闘下巻 201）

心の低さを培う

「主は高くいらせられるが低い者をかえりみられる。しかし高ぶる者を遠くから知られる。」（詩篇 138:6）

誇りや自己尊重を片鱗（へんりん）たりとも心にいだいていてはならない。なぜなら、それはイエスを心から締め出し、その空いたところをサタンの特質で満たすからである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1891 年 8 月 4 日）

自らを知るということは、へりくだるということである。自己を知ることにより、自分自身のすばらしい資質を朗々と述べることによって、いと高き者を喜ばせようとする気質はまったくなくなる。自分たちの罪と不完全さを悟って、わたしたちが熱心な懇願をもってイエスの足元に来るならば、わたしたちの嘆願が聞かれずにやりすごされることはない。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1885 年 2 月 19 日）

われわれが出会わねばならない困難は、キリストのうちにかくれている柔和によってずっと軽くなる。もしわれわれが、主の謙遜を身につけるなら、われわれは毎日受ける軽蔑や拒絶や迷惑などを超越し、そうしたものが心に暗い影をなげることがなくなる。……

キリストのへりくだった柔和な精神をあらわす者たちは、神からやさしく見守られている。彼らは、世の人々からさげすみの目をもって見られるかも知れないが、神の御目には非常にとうといのである。賢明な人、偉大な人、慈善に富んだ人たちだけが、天の宮への旅券を獲得するのではない。それはまた、熱心で、休まず活動している忙しい働き人だけでもない。そうだ、心の貧しい者―キリストの内住を熱望し、謙遜な心をもち、神のみこころを行うことを最高の望みとしている人こそ、十分に天国にはいるのである。（各時代の希望中巻 6,7）

自分たちの衣を洗い、小羊の血で白くするすべての人は、厳しい試練にあうことになる。試練の中にあって、わたしたちは堅く立ち、わたしたちを贖うためにご自分の尊い命をお与えになったお方に誉れを帰すよう求めるべきである。わたしたちの働きにおいて、強い反対の底流に出会わなければならないであろう。本物の改心、新しくされた心は、わたしたちを試練の下にあってもやさしくあるように守り、生活において神の恵みをあらわすことを教える。最終的な清算の日にキリストのみ口より神の都への歓迎の言葉を受ける人々は、厳しい状況下にあっても改心したままでいた人々である。（オーストラリア連合総会記録 1907 年 4 月 29 日）

2月25日

リバイバルの鍵

「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖ととなえられる者がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕ける者の心をいかす。』」（イザヤ 57:15）

主はご自分の民の間にリバイバル、すなわちご自分が彼らに課された特別な義務を認めるように、求めておられる。神の畏れをいだいているすべての魂が、神の栄光だけに目を向けて、ご自分の前に歩み、働くようにと求めておられる。なされるべき大いなる働きがある。そしてだれ一人として日々神のみ前に自分たちの心をへりくだらせ、このお方が送られるすべての光のうちを歩まないかぎり、その働きを適切に代表することのできる者はいない。

神の民が、一致と無我のうちに、心のへりくだりをもって働くならば、成し遂げられる偉大な働きがある。すべての自己称揚をみつけ、取り去らなければならない。真理と義だけがこの時代のためのテストに耐える。わたしたちは日ごとにわたしたちと共に神の御霊にいていただく必要がある。それはすべての悪い思いと賢明でない行動から守られるためである。自分たちの目がこの危険な時代にあってわたしたち個々人の霊的な必要に対して盲目になることを恐れるべきである。多くの自称クリスチャンたちが利己的な利益を築き上げるのに夢中になってしまっている。わたしたちは今、霊的な眠りから目覚めるべきである。……

教会員がクリスチャンになること、すなわちキリストに似た者になること、へりくだり、純粋で、正直になることを、全的に決心するとき、主はご自身の聖霊によって、ご自分を表してくださる。今こそなされる必要のある働きをなすべき時である。男女を神から、また彼らの助けと優しい同情を必要としている人々から引き離すように導くのは、自尊心である。……

魂のへりくだりを大事にしよう。そして神に完全に明け渡そう。わたしたちの教会は利己心と誇りを捨て、魂をむなしいことへと持ち上げるのをやめよう。終わりは近い。そしてわたしたちは警告と憐れみのメッセージを世に与えなければならない。そしてわたしたちの唇をもってこのメッセージを宣布するだけでなく、わたしたちの単純で柔和な正しいことを行う生活によって、神のみ言葉の真理を信じていることをあらわすべきである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1909 年 8 月 5 日）

2月26日

一人だけが義とされて家に帰った

「ふたりの人が祈るために宮に上った。そのひとりはパリサイ人であり、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は立って、ひとりでこう祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています』。ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけようともしないで、胸を打ちながら言った、『神様、罪人のわたしをおゆるしください』と。あなたがたに言っておく。神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」。」（ルカ 18:10 〜 14）

パリサイ人と取税人の物語の中で、キリストはわたしたちが学ばなければならない最も重要な教訓の一つ、すなわちうぬぼれの危険をお教えになった。ここで、二種類の礼拝者が提起されている。パリサイ人によって表されている種類は、敬神が際立っており、品性の非常に優れたものを持った人と見なされている。もう一つの取税人によって表されている種類の人は世の目から見てはるかに劣っている。しかし、これは正しい評価であったであろうか。否。真実は正反対―天においてなされている彼らの評価はまったく反対であった。パリサイ人も取税人も心を探られ、人をかたより見ない神の御目の下にあった。富や肩書き、才能や評判が、神の恩寵を得るために推奨することはない。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1885 年 2 月 19 日）

ああ、わたしたちが自己に信頼しない同じ精神と、自分にまったく価値がないという同じ自覚を持つことができるように。わたしたちは、義とされて自分の家に帰っていくことができるように、キリストの恵みに自分の魂のうちに入っていただかないのであろうか。……

ほんとうの休息と落ちついた心の平安がこれほどわずかしかない理由は、自己に対する最高の愛があるからである。わたしたちのなすすべてのことに自己が混じっている。わたしたちは自己をもっと少なく、イエスをもっと多く持たなければならない。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1888 年 8 月 28 日）

教会のすべての個々人は、自己を吟味し、自分が真理のうちにいるかどうかを調べるべきである。この厳密な心を探る働きが、重要不可欠である。信仰の祈りが絶えず、神へと上らなければならない。（同上 1888 年 6 月 26 日）

2月27日

さばきの時に不平を言ってはならない！

「兄弟たちよ。互に不平を言い合ってはならない。さばきを受けるかも知れないから。見よ、さばき主が、すでに戸口に立っておられる。」（ヤコブ 5:9）

キリストは、ご自分に従うと公言する人々、すなわちご自分の弟子たちが、クリスチャンの愛を培うことを怠るとき、彼らが信仰のうちにある自分の兄弟たちの心に痛みを生じさせるようなやり方で行動するとき、深く悲しまれる。彼らは自分たちの宗教経験を損ない、自分自身と他の人々の道につまずきの石を置くのである。彼らは自分たちが信じると公言する真理を辱める。自分の兄弟たちを扱う際の感情的な言葉や威圧的な行動によって、彼らは自分たちがあらゆる義の敵の精神によって支配されていることを表す。彼らは神聖な火の代わりに異火を用いる。

人が新たに生まれ、キリスト・イエスにあって新しい人であることを示すことのできる最も力強い証拠は、自分の兄弟への愛を表すこと、キリストのような行為をすることである。これこそ、担うことのできる最もすばらしい証拠である。（世界総会冊子 1900 年 7 月 1 日）

もしわたしたちがキリストのさばきの座の前に立ち、自分たちについて言われることを聞くことができるとすれば、自分の品性について、自分自身が下す評価とは、何と違った内容を聞くことであろう。わたしたちは岩の上に落ちて、砕かれなければならない。こうして自己が全くなくなり、イエスがすべてになるためである。

わたしたちの家庭の中で救いの感化力が働かされるように、良い家庭宗教が必要とされている。わたしたちは自分自身の家庭という囲いの中で、優しく、同情深く、親切になり、炉辺にいるいとしい人たちに好意を示すことによって、伝道者となることを学ぼう。多くの家庭の中で、愛の精神が大いに必要とされている。語られる言葉が、柔らかい植物の上に下って回復させ、生気を与える露や雨のようであるべきときに、しばしば撃ちつける情け容赦のない雹（ひょう）のようである。あなた自身のぶどう畑の中で働き、愛の精神を培いなさい。あなたの心と家庭の中で教えを受けやすい、キリストのような精神が見られるまでは、あまりにも外の働きに熱心なってはならない。……

もしイエスがすべての家庭に宿っておられるなら、教会は主のご臨在の回復させる力を感じることであろうに。（1888 年 4 月 28 日）

砕けた悔いた心

「神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心をかろしめられません。」（詩篇 51:17）

あなたは自己に死に、肉を十字架につけなければならない。あなたは自分自身を十字架につけるにあたり、方法や手段を考案する必要はない。自分を苦しめる苦行には何の功績もなく、テストが訪れたときには、価値がないことが明らかになるであろう。わたしたちは心を神に明け渡さなければならない。それはこのお方がわたしたちを新たにし、聖化し、わたしたちをご自分の天の宮にふさわしいものとすることがおできになるためである。わたしたちは特別な時を待ってはならない。そうではなく、今日、罪の僕となることを拒んで、自らを神にお捧げしなさい。あなたは自分自身の力でほんの一時でも罪を振り払うことができると思うであろうか。それはできない。イエスは罪深い肉の様をご自分に負われたとき、罪人として取り扱われた。それは罪人が義なる者として取り扱われることができるためであった。御父はキリストを信じるわたしたちを、ご自分のひとり子を愛されるように、愛してくださる。こうして信仰によって、わたしたちはキリストの義をつかむことができ、救い主はわたしたちをあらゆる罪から救われるのである。改心した魂はキリストが憎まれるものを憎み、キリストが愛されるものを愛する。このお方はご自分の死と苦しみによって、あなたが罪から清められるための備えをなされたのではなかったか。あなたはイエスの血をとって、それを信仰によって自分の心に塗らなければならない。なぜなら、それだけがあなたを雪よりも白くすることができるからである。しかし、あなたは言う。「わたしのすべての偶像を明け渡すことは、わたしの心を砕きます」。これこそ必要とされていることである。すべてを神に明け渡すことによって、あなたは岩の上に落ちて砕かれなければならない。遅らせることなく、このお方のためにすべてを明け渡しなさい。なぜなら、砕かれないかぎり、あなたに価値はないからである。

なぜさらに長く待つのか。なぜ神をみ言葉どおりに信じて、「わたしは自分自身をあなたにお捧げします。これがわたしにできるすべてです」と言わないのか。…

イエスはあなたにあるすべてを欲しておられる。このお方はあなたの魂のために無限の代価を支払われた。あなたが持っているもの、あなたの存在そのものはこのお方に属する。神があなたを助け、あなたは見て生きることができるように。キリストは、もうまもなくおいでになる。このお方は苦しみのうちにわたしたちの兄弟となられた。そして、わたしたちがまもなくこのお方のまことの御姿を見るという希望は、なんという喜びをもたらすことであろう！わたしたちはここでもう少しの間苦しむであろうが、それから永遠の幸福に入るのである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1892 年 8 月 8 日）

Memo

（70 ページの続き）
してあなたが読むときに、えんぴつと紙を持ってきて、彼らがどれほど長く生きたのか線を引いてみてください。100 年を 1 センチとしてみてください。注意深く書き上げていくと、非常におもしろい事実に気づくことでしょう。

まず、この章に述べられている 9 人の父祖たちに気づきます。そのうち 8 人は、アダムと同じ時期に生存しています。ただノアだけがアダムを見ませんでした。

二番目に、彼らのうちに 2 人、つまりメトセラとレメクは、アダムを自分で知っていたばかりか、ほとんど洪水の時にいたるまで生きていました。

三番目に、ノアは洪水が来た時に 600 歳で、その後 350 年生きたことがわかります。

そして、これは何を意味するでしょうか？それはこれらの遠い昔にいた人々は、創造の歴史を知っていたはずだということです。全員が、エデンについて、また神さまがアダムとエバのために造られた輝かしい園で彼らに表された神様のすばらしいいつくしみを知っていたはずです。全員がまたアダムとエバの誘惑と堕落を知っていたはずです。そしてそのすべての中で最も重要なのは、アダムとエバがあまりにも不注意に投げ捨ててしまったすべてのものを贖い、回復してくださるという神の約束について、全員が知っていたはずだということです。

父親から息子へ、一人の父祖からもう一人へ、すばらしい物語は伝えられていきました。ですから、罪の言い訳はあり得ず、まただれでも神さまを知らなかったり、心を尽くして神さまを愛さない理由はあり得ないのです。

豆腐キッシュ

■材料

〔クラスト〕

薄力粉	200g
オリーブオイル	90g
豆乳	90g
塩	3g

〔フィリング〕

木綿豆腐	300g
ターメリック	小さじ 1
塩	3g
昆布顆粒だし	3 g
白みそ	大さじ 1

〔具材〕

玉ねぎスライス	1/2 個
ほうれん草ざく切り	100g
マッシュルームスライス	1/2 パック
パプリカ	1/2 個
にんにく	1 片
塩	少々

■作り方

1. クラスト材料を全て混ぜます。
2. 生地を丸型の形に沿って広げ、フォークで数か所穴を開け、200℃に予熱したオーブンで 13 分ほど焼きます。
3. フィリングの材料を全てブレンダーで撹拌します。
4. 具材を炒め軽く塩を振り、余分な水分が飛ぶまで加熱します。
5. フィリングと具材を合わせて、焼き上がったクラストの中に加え、180℃に予熱したオーブンで 30 分程度焼きます。
6. 型から外して粗熱が取れたら切り分けて完成です。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45（公開放送）

礼拝説教：11:00-12:00（公開放送）

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】http://www.4angels.jp

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□福音の宝
□聖所真理

お申込先：sdarm.shomaru@gmail.com

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。

【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。

聖書物語

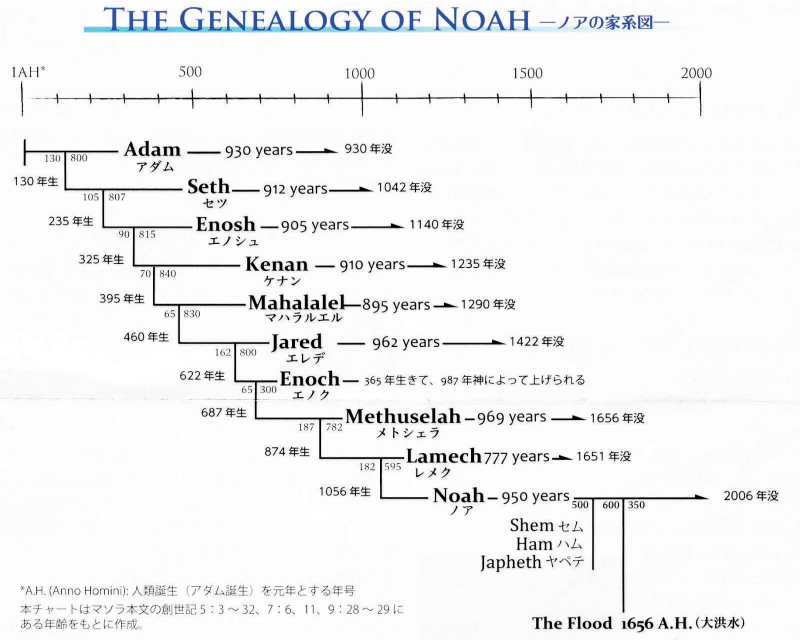
パート2　第19話

アダムの最後の誕生日（II）

しかし、アダムだけが長生きしたのではありませんでした。彼の子供たちも長生きしました。カインとアベルを失ったあとに生れて、彼の心を元気づけたセツは、912 歳まで生きました。そしてセツのむすこの一人であるエノスは、905 歳まで生きました。

他にもとてもとても長生きした人々がいて、カイナンは 910 歳、マハラレルは 895 歳、ヤレドは 962 歳、またその中で一番長く生きたのはメトセラで 969 歳、つまりほとんど 1000 年生きました。それから、他にはレメクは 777 歳、ノアは 950 歳でした。

これらの大昔の古い人々のことを創世記 5 章で読むことができます。そ



（65 ページに続く）